

南海
奇賞

鯨
之
記

南海
奇賞

鯨之記

淵簡修禮撰

附錄

南行日記
南遊ノ記

南海鯨之記
奇賞

目次

總說

漁浦地方

漁事大綱

鯨品附記

潮候

號令

器械部

船

旗幟

銛

網

諸
罔

海
鱈
説

漁
鯨
行

附
録

南
行
日
記

南
遊
ノ
記

南海奇賞 鯨之記

澗簡修禮撰

南洋舎勝臣撰

総叙

余曾テ以謂ク、吾熊野太地浦ハ古ヨリ海鱈ヲ以テ、其ノ名タヘル所ニナン有ケル。且鯨魚ハ吾方方物ノ第一品ナレハ、我ニシテ之ヲ知ラズシテ可ナランヤ。因テ每其捕人ニ遇ハ必ス此コトヲ以テ問マヽニ、粗ニ其ノ概略ヲ聞コトヲ得ト雖モ、遂ニ一遊入浦睨ヲ得ザルコトコソ遺憾ナレ。今茲戌子ノ初冬末コロ、余南遊シテ遂ニ太地浦ニ過ク。和田氏ノ惴疑ヲ得テ、淹留数日ヲ経又。乃チ又以謂ク、今次コソ必ス其方法ヲ一觀シテ初念ヲ遂メヤト。因テ日毎ニ主人ニ從フテ、燈明尖サキノ假楼

楼頭ニハ常ニ往テ眺望ス

此処毎夜巨燈ヲ掲ケテ洋船ノ標的トナサシム因テ燈明ヲ以テ名トス

千里鏡数个

置テ、候吏^{モノミ}数人專テ漁事ノ一政^{ゲチ}ヲ司ル。又南一樓アリ、梶取埼ト云。相去ルコト五、六町^{バカリ}所。両司其方ニ從フテ、各高愷[?]ニ據ル臨時ノ令ヲ下ス。此地ハ村里ヲ去ルコト十八町ノ突觜ニシテ、看樓左右大海ヲ睥睨シ、東南ハ則溟渤[?]天ニ際シ極月森々タリ。実ニ鯤鯨ノ出没スル所南海ノ勝境也。於是更ニ首ヲ回シテ縱觀スレハ、風帆遠近ニ漂渺トシ、漁艇東西ヲ旁午スルノ景況既ニ應接ニ逞ナク、又千里眼ヲ飽カシム。襟懷漉トシテ坐ニ清風ニ御シテ、南溟ヲ圖ト欲スルノ意ア

三、亦愉快ナラズヤ。然レドモ鯨魚ノ来ル時^{壺頭鯨ノ西ヲ}比日ニ尾^{指シ上ル者}

尾ニ及ヘトモ、トカクシテ網場ヲ躲^{ハズ}シテ遠ク逃ユヘニ、捕獲ニ由ナシ。夫レ鯨鯢ノ洋中ヲ横行潜水スルヤ、頻々海面ニ浮出シテ潮水ヲ噴ク。其状直上数仞大空ヲ衝テ飛霧ヲナシ、乍手被沈没ス。又其行所ヲ知ヘカラズ。以故ニ漁圖^{セコ}船概其方向ヲ辨シ、其噴潮ヲ物色シテ尾綴シテ相逼。且海上ノ耳目ハ山手ノ望樓ニ在テ、其ノ制

約ヲ奉スルコト影ノ形ニ随フガ如シ。故ニ海南数十葉漁船其進止
動靜ハニ、候吏一指點ノ間ニ歸シテ步趨ヲ誤マラス。點々泛ニニ
五隊ヲナス宛モ、一幅書圖中ニ在テ、相共ニ呼應周旋スル力如シ。
今ヤ當面這等ノ光景ヲ看得テ、吾力素心ヲ償フニ足レリ。如之每
霄主人余力爲ニ、其両端ヲ叩テ手勢陳說鴨然トシテ、身席ニアル
コトヲ忘レシム。亦倍マスマス以南遊ノ志ニ酬コトヲ得タリ。亦主
人ノ賜ナル哉。遂ニ其梗概ヲ筆シテ撰次シテ冊子トシ以テ奇賞ニ
供ス。而シテ之ヲ細閱スルニ、猶未タ悉サミルモノ多シ。又恐ラク
ハ其間テ錯スル者有ランコトヲ唯願クハ、再ビ彼ニ遊ンヲ、質問ニ
其不逮ヲ補正セマホシキコトヲ、其能果サンヤ否ヤヲ知ルノミ。

漁捕ノ地方

夫レ吾力熊野浦ハ炎壤ノ極界。南溟不測ノ絶境ニシテ、北極出地
三十四度内ニ在テ暖帶ヲ去ルコト甚遠カラス。且直南ノ地方八寸

吳尺楚ノ一土壤アルコトナク、土地勢連亘坤垠ヲ盡シテ墨瓦蠟泥加沂接ス。番舩モ航海ノ舵ヲタへ、火鵬モ垂天ノ翼ヲ斂ヲシ、則チ億萬ノ鱗屑當浦ニ群簇湊会事ノ限リシラレスガ、中ニ鯨魚ハ殊ニ水族ノ巨魁

ニシテ、所謂魚王ナル者也。玉篇ヲ

見ヨ

其族類モ亦一ナラズ、其或ハ前

洒陰及臍乳ヲ具シテ胎生シ

鮫魚鯨ノ類モ亦胎生ナリ

特ニ其子ヲ保護スルコト甚

ク、軀數十銛ヲ受ケ動カス死ヲ愛ラシカザルニ至ル。又咆哮スレバ山壑コレガタメニ震響ス。其他魚ニ殊絶ナル所以ノモノ知ルヘキ也。彼ノ所謂北溟千里ノ鯤ナル者因ヨリ、壯列ガ寓言ニ出シコトナランガ、唯陸氏ノ音義ニ或人鯤ノ字ハ、當ニ鯨ノ字ニ作ルヘシト云ヘルハサルコトナランカシ。而之ヲ捕ノ難キ百ノ一ニヲ得カタキ者也。サシモ横海活澆ノ大魚ヲ殪シ獲コトナドテ、容易事ニヤハアル。必ズ数十舩 数百ノ乗ヲ用テ智巧ヲ究、多方カヲ盡セトモ

猶且獲易カラズ。或ハ網ヲ衝テ逃閃シ。或ハ鉞ヲ負ツ、遠ク遁ル。或ハ數百ノ逆鬚鎗ヲ拂却シテ、其行衛ヲ知ス。或ハ間船ヲ打碎シテ人共ニ没スルニ至ル。其最モ壯大ナル者長鬚鯨ニ至テハ、決テ制御スヘキニ非ルヲ以テ、他ニ見スグレテ漁ヲ戀サル也。嗚呼大物ノ性、想像スルモ餘リアリ。其器械費用ノ浩繁ナルモ亦從テ準知スベシ。古來ノ捕漁スルノ地方、常州 綏州 勢州 肥前 筑前ノ數處ニ過ギズ。而シテ其主管家西海ニシテハ益富氏 南海ニシテハ太地氏はレ巨璧也。且ツ官創條有テ、私窮ニ漁スルコトヲ得ス。吾力郡中ノ如キ凡ソ三所、北ニシテ三輪崎 南ニシテ

右座浦ナリ。太地ハ其中間ニ在

相去ルコト各ニ五里ニ過ギズ

左三輪崎ヲ顧ミ、

古座浦ヲ腋シテ海上ニ突出スルコト半里許、所謂灯明 梶取両崎ノ看司、各要衝ノ地ヲ占メ、相待テ其便ヲ候フ。地ノ理ヲ得ルコト如此故ヲ以テ漁事モ亦大也、両浦ノ及ハザル所以也。因テ今此ニ詳ニシテ而シテ彼ニ略スル者爾リ。

漁事大綱

夫レ海鱸ノ漁船ト謂バ其製狭小ニシテ、シカモ輕捷ヲ貴ム。故ニ唯漿ヲ用ヒテ帆セス、風濤ヲ断テ直前飛力如シ。其ノ漁手船ハ每船艚八

挺ヲタツ。一船ノ長刃刺ハザシ一人刃刺ハ銛ヲ投テ艚頭ニ直立唯魚ヲ刺ス事ヲ主ル老練ノ者ヲ撰ム刺水主一人

副也、乗組都テ十五人ナリ。其他網船 持左右船 樽船 道具船 等。亦皆乗組等ノ定制有テ、各丹青モテ満船ニ花草 器財等ヲ描寫テ、

是力識前ヲナス。於是先ヲ漁船數十艘、其番手々々ノ方位地從中番

ル
及北番東番 海面東西三里 五里乃至十里ノ波間ニ沈ツ、鯨ノ道來
西番等有リ

働待得テ、遠近相報應シ漁船一・二・三船ノ番付ケ也 手番ヲ以テ、其

ヲ詮トスルコト也。陸手ニハ兩所ノ舖司其号令ヲ掌。一二灯明力
ハナ鼻

孝ニ楫取崎是ナリマツコ鯨ノ来ルハ春夏ノ交ニ在テ遠洋ヲ往ク
豫テ旗幟号煙

故ニ斥候番所ハ一際高キ山手ニ在リ

ヲ 摩力
口ラ摩采等ノ相圖ヲ定約シテ、時ニ臨テ哨士諸船ヲ令シテ、手ハツ

合サシム。其部下ニ一隊ノ諸船十里外ニ在ル者ト雖ドモ、其指揮ニ
應シテ進退歩趨ヲ誤ルコトナシ。其海陸應答ノ状眼熟シ神領シ
テ、益從來操練ノ至レルヲ見ル。九十月ヨリ霜月頃マテハ坐頭鯨
ヲ漁ス。坐頭ハ手鱗長クシテ銛ノミハ得力タキ故、網ヲ設ケテ之ヲ
待ツ。其魚見附シ船ハ乃白旗ヲ立ツ。則諸船之ヲ望テ追縦シテ過
ツ、網場ノ

網ヲ指テ追マハス魚ヲ見付テ諸船取囲ミ追フヲ一モヤイト云後 磯手ニハ十餘ノ
ツイデ魚来ヲ追フテニモヤイト三モヤイト云

船力ネテ芋網ヲ載テ待設ク。鯨漸々網場ニ向ヒ来レハ、候吏法螺

ヲ吹キ采ヲ舉テ網ヲ張シム。或ハ二重 或ハ三重其令スル所ニ從
フ。鯨既ニ網ニ罹ハ直ニ網ヲ蒙テ狂騰ス。或ハ二頭連 或ハ三頭連
ナルコトアリ。亦共ニ網ヲ被テ活澆乱跳ス。勢子船逸ヨリテ連ニ銛
ヲ飛シテ之

身衝ク。快手攢刺數十有銛 或ハ二百一至ル魚ノ大小強弱ニ 則鯨ノ一

應ジテ銛ヲ入ル

上瞬息間亂麻ノ叢ヲナス。鯨大ニ疲アセテ弥網ヲ尾鳍ニ纏繞水霧ヲ噴
キ、浪ヲ搏テ轉回スルコト甚シ。船モシ少シク之ニ觸レハ即破却
ス。故ニ諸船其獮勢ヲ避ケテ、進退倏忽前後ニ出沒シテ、克ツ早
銛 角銛 中銛ナド次第シテ、擲々又ハ柱銛ヲ投ス。鯨身次第々々
ニ大銛

ヲ負テ疲困シ、氣息奄々トシテ波上ニ浮出、其時大木中劍小ヲ以

ノ製有

肺肝ヲ速刺ス 此時魚ノ疲ヲ見ルヲ要トス。若シ魚猶壯ケ 之ヲ魚殪船ト号ス 凡

レハ狂テ船ヲ破ル。若又疲極レバ沈ス也

四

也此刃刺ハ極テ強壯ノ者ヲ撰テ、時ニ劍勢血ホトバシ進ルノミナラス、鼻

異 二血汐ヲ噴發シ、蒼海輒?于紅波ヲ起ス。又臨絶ノ際声ヲ發シテ雷
吼

スルコト淒シ。其ノ斃ナン期ニ及テ其ノ機ヲ見テ、究竟ノ壯水主多者ク之

ヲツ
ト刃ヲロニシテ海中ニ跳リ入、直ニ鯨背ニ跨リ其肉ヲエゲ刮リテ、竅ヲ

顛鼻ヨリ三尺許 後ヲ云コレヲ大手形トモ、腰ヲ腰手形ト云

ツコト凡三ツ 先ツ 顛次ニ背次ニ 尾ノ三所ナリ 及苧網ヲ貫シ来ル。之ヲ手形切ト唱。魚

ノ大氣既ニ去テ 次ニ背微息行フコトナリ、若早マル時ハ猖獗ノ勢慮ガタク、晚ケレバ魚死シ沈シテ復得ベカラズ、故ニ此見切殊ニ大事ナリトゾ 然レ

トモ鯨有テ、忽然トシテ蘓息シ海裏ニ没シテ奔ル。或ハ半里 或ハ

里餘ニシテ浮キ出ス。或ハ潜行一ト時頃ヲ經ルニ至ル。然レトモ壯
者仍ヤハリ刃ヲ伴テ堅持シ、或ハ其魚肩魚ル銛ニ取り付テ確乎トシテ動力

ス。魚ノ浮沈ニ随テ一死ヲ省ミズ。鯨又或忽チ身ヲ轉シテ直下ニ没入シ、海底ニ撞到ルモノハ、其ノ狂猛ノ勢畏震スヘキニ堪タリ。カ、ル者一過ハ輒チ手ヲ放テ棄テ返ル。此一件其危険ノ景状聞者猶心ヲ寒セリ。實ニ

生死一間ノ手段也。

能此至難ヲ犯シ經ル者累於進シテ刺水主刃刺トナル於是持左右舩ニ艘鯨ヲ挾ン

ニテ、各手形鈎ヲ撞込

左右各一本ツク、芋網付也

柱ヲ没シ、兩鯨ノ品ノ凡ソ十餘種

鯨長尋六 其腹部ニテモ亦メグリ八尋有 然レトモ亦八尋餘ナルモアリ

至ル。所謂坐頭鯨 背美鯨 兕鯨 末鯨鯨 鯨鯨 長須鯨 之等六鯨

大和本草ソ六種ナリ、又菱長年間筑紫ノ漁ト称シ本鯨トス、其長大底四 五ニ其品凡人予ヲ以テツキ初メシ事ヲ云ヘリ

尋ヨリ七 八尋ニ至ル。或八十尋餘ニ及ブ。唯長須八十四 五尋ヨリ三十尋ニ及ブト云。

爾雜翼一曰ク 鯨常以五月生子チ岸八月導而北大者數千里長

藥選續編ニ、海鯨小ナルモノ三 四十俣 大ナルモノ六 七十俣ヨリ百俣

ニ至ルト云ヘルハ傳聞訛ナリ。誤又其鰓骨器具ニ作ルヘシトハ、エンバヲ誤リ聞シ也。又古今注水經徑カノ長數千里等ノ説ハ荒唐誇大ノ言、其信スヘカラサルハ因ヨリ也。唯逐土ノ人ノ鯨ヲ説クハ、大底轉訛相承ケ、遂ニ漁郎ノ胡モノワライ慮ヲ免レザル者也。和蘭人曰ク 鯨ニ三種アリ、其最モ大ナル者ハワルペス。其次ハプレンスペス。其次ハノルカブルト云。此國有ル所ノ黒色無鱗無耳者ハプレンスペス也ト。其説采覽異言ニ見テ其長大ヲ説ズ。子持鯨ハ多ク座頭鯨ニアリ、諸鯨ノ胎育時節 産月等不可知。腹中ニ在ル子一丈ヨリニ尋許、必ス皆一胎一子也。浦人鯨ノ長短ヲ計ルニ幾尋ヲ以テス。尋ハ四尺也、曲尺一尺二寸ヲ以テ一尺トモ。則四

尺ハ曲尺ノ四尺八寸ニ當ル。鯨尺又布帛尺ノ名蓋シ此ニ本ツクカ。其鯨ヲト云フ

ルノ法 潮吹ヨリ計テ尾岐ニ至テ止ル。其前後ハ之ヲ除ク。其除ク所ノ長サ三・四尋ニ下ラス。故ニ七八尋ト云フモ其全体ヲ通計シ九・十尋餘ニモ及ビナン今爰ニ記ス處ノ尺モ亦鯨尺ニ從フ。覽玉ハ人準ヘテ其長サヲ察知スヘ

シ 未鯨鯨ハ其潮吹頭前ニ在故眼ト手羽トノ間ヨリ計リテ尾岐 腰鬚ニ至ル

冬ヨリ春 夏ニ至ルマデ諸鯨ノ過去ル者凡千ニ 三百乃至千四 五

百

頭ニ至ル。船相約シテ左右待合コトヲ要トス。持左右ノ名 此ニ取ル 又萬鏃カ、ス繩付

ナヲ刺スコト亦二本也。凡ソ鯨魚絶スレバ、輒沈論シテ之ヲヲラスト云。唯マツコ鯨ハ死シ

テ沈マス後得ヘカラサル者也。因テ手形切以下ハ其沈スマジキ爲メノ備

也。偕カ、ス巨索数條ヲモテ大マワシ等鄭重ニ縛住シ、列卒船繩ヲハヘテ

連ニ盪ユギ立ル。之ヲ頭漕ト云フ。魚又其最後ニ臨テ卒爾?再トシテ狂躁

悶乱シ、持左右セシ船ヲ蕩上震下ス。之ヲ立ガリヤト云。カ、リ

シカハ、諸手ノ船取困テ念佛称名シテ其寂滅ヲ取シム。斯テ一行

競勇シテ宛モ連城ノ壁ヲ奉ジテ、喜見城裏ニ入ルノ形勢、衆勢各

々幟ヲ押立、櫓拍子相和シエンエン蜿蜒相應シ、山海ニ響答シテ凱歌ニ均

シク粉彩水ニ挾シ。飄帶風ニ靡テ屠所ノ濱辺ニ漕寄レハ、陸 老

若群ヲナシテ喜色遠近ニ溢ル。是ヨリ絞車引曳シ、随テ上レハ随

テソツカツ割ス。口割亦自法

アリ一霄主人難籠ト刃子トヲ取来テ、仮一解鯨ノ技ヲ示ス。其ノ變百骸其骨緊ヲ解

割奏刀ノ法恢々乎トシテ竅ニ中テザルモノナシ、妙ト云フベシ

也

了リテ、一身織毫ヲ剩サス。即日取り辨テ事ヲ終、是亦其利用ノ大ナル言バカリナシ。何ソ畜解牛ノ伎倆ノミナランヤ。時ニ其汀ニハ流脂金ヲ浮テ数町血海ノ阿トナル。

冬至ノ侯ヨリ、翌歳ニ三月ノ比マテハ背美鯨及兒鯨

クヂラバ其名ニシテ鯨ノ子ニハ非ル

ヲ漁ス。又未鯤鯨ハ春二月ヨリ他夏比マテ大洋ヲ通ル。其性軟弱ナル者ニシテ、銚数僅二十枚、二十枚ヲ以テ掛得ル也。背美鯨兒鯨ノ二魚ハ網ニモ罹。銚ニテ突取ル勢古舩五里、七里ノ洋中ヲ物色シテ、見付次第ニ銚ヲ投ス。初銚ヲ首功トシテ陣中ノ先登ニ均ク、次ヲ二ノ

銚 三ノ銚トテ各褒賞有テ、

褒賞ハ三ノ銚ニ止ル

互ニ増進勉勵スルコトトナシ、爲

四番銚ヲ入レシ舩ハ大幟ヲ建ル。則山手看司ヨリ号煙ヲ掲ケ

此合圖ニ種々アリ

四方ノ漁罔ヲ左右シテ、カケヒキテッ角ヲナサシム。諸舩ハ其指教ヲ受テ網罹

漁取スルコト坐頭ト一般ナリ。然レドモ坐頭ノ網ヲ纏マトヒケルム累ニ異ニシテ、鬣ヲ掀尾ヲ鼓テ内轉沈浮スルコト畜ナラス。其狂横暴突ノ勢動スレバ、船コレガ爲ニ粉碎ス。就中背美ハ鯨中ノ多力勇敢ナル者ニシテ

其無数ノ銛ヲ負ニ及テハ吐所ノ漸水盡ク血也。之ヲ血煙ト云歲コトニ船ヲ破リ、人ヲ過コト有ルニ備テ漁

獲ルニ及ンテハ、困船三艘各注進幟ヲ建レハ、則チ候吏螺ヲ吹キ采ヲ擧テ村里ニ報知ス。之ヲ止リ采ト云。而後ノ處置ハ大率坐頭鯨ニ同

香川藥逕一俗諺ニ四取得海鱈一頭七村得利

ク、海陸欣拆ノ声々利潤遠邇ニ周ク。獻食飯禽獸ニ及ブゲニ、七浦歡樂トノ俚諺サコソト想合サレタリ。

大和本草ニ、月山叢談ニ巨鰈ヲ捕法アリ、本法ニクジラ捉法ニ同シトイヘリ。余未ダ其書ヲ見ズ、其同異果シテイカナルコト知サル也。

鯨 品

海鯨 又鯨ニ作ル 海鯨ハ泥鯨ニ対スルノ名也。其形能ク似テ、 其雄ヲ鯨トシ、其

一ハ至テ大ナルモノ、一ハ至テ小ナル者也

ヲ鯨トス。通シテ鯨ノ字ヲ用ユ、クジラト訓ス。古名勇魚イサナイサナド

リ

イサナドリハ古歌ニヨメリ。本和本草ニ、昔弓ニテ射ンベ 蝦夷人ノ 因ニ記ス 称スル所

ル死シテ浦ニヨル。イスナリトリ射逸也ト云ヘリ

蒼 太地浦曾テ漁スル所 寛政十一年巳未 坐頭鯨ノ肉中ニ於テ、石鯨ヲ得タリ。 十一月二十三日

黒色ニシテ暗理アリ。重サ九錢 長三寸六分 幅一寸。惜ラクハ? 膚損全カ
ラズ。然モ之審ニスルニ、眞ノ石弩ナリ。又曾テ兎鯨ノ軀中ニ白鯨ヲ得タ
リ。長

白鯨ハ蓋シ骨骸ナルベシ

五 六寸 幅二寸許 其ノ質白クシテ石ナリヤ 骨ナリヤ辨認シガタキ者
也

得 粗全フシテ稜道アリ 共ニ圖ヲ後 余太地氏ノ許ニ於テ、皆臚目スルコトヲ シノギ

ニ附ス。

盖是二千萬里外夷眼ノ海上ニ於テ射中所ノ物 依然トシテ漁軀中ニ齋シ
来テ一奇賞ニ供ス。誠ニ奇中ノ奇品ナル者也。於是諸鯨ノ經由スル所ヲ
推考スルニ、是レ必ス大東洋ヨリ上リ来ナラシメ、然レハ亞墨利加等ノ洲
ヨリシ

ル沿海ノ地方ニ随テ、アシハセ室韋 加摸西葛杜カカ加カ路カ轉カシテ今カ
ムサスカト云 野作等ノ地ヲ往来

カムサスカ魯西亜人ガ「カムシャーツカト称スル所ナリ

トキハ、我常総 紀ノ地其順路ニ當ル理。或ハ然ンアシハセ室韋ハ古ノ肅慎國ナリ。
我

常総邦常陸上総下総紀伊ノ地ヲ云

寸 力王代ニ聞コシクコシ齋明天皇 夏土ハ周ノ武王ノ時肅慎氏枯矢石弩ヲ貢ス。長口

御宇

有咫魯語ニ想ニ其俗今猶石弩ヲ用テ漁獵スルカ。鯨或ハ適ニ其地ヲ過テ、
見見上

寛政十年五月江戸品川ノ海ニ鯨流レヨリタリ。海鱸録ト云フモノ此時ニ出ス 大カ久鯨志ニ似タリト燕石門志ニ見、此鯨未鯤ナルベシ

廣 所ナランモ知ルヘカラス或云其地大海濱有テ能ク鯨ノヨル所ナ 然トモ殊方辺塞ノ

リ其人弓矢ヲ以テ之ヲ射捉ルト云フ

邀ナル石弩ヲ邦、何ソ特ニ蘭慎氏ノミナルコトヲ知ランヤ。サレバ其由来
スル所何レノ地ナルヲ的知スヘカラザル也。唯石弩ハ遠夷ノ異品、シカモ
遠古ニ聞ユ。今ヤ数千歳ノ下モ何等ノ縁由ニシテ、親ク之ヲ視ルコトヲ得

タル奇ト謂ハサルヘケンヤ。姑ク其由ヲ記シテ、以テ後ノ考証ヲ俟ツ。

鯨一名魚五海翁海羊 □^{タン}鯨 オサグリ
御所言葉

或人云万葉集一勇魚捕トスル玉津島明神ノ歌載スル鯨其由来久シキト見タリ

蘭山子ノ説ニ正字通ニ□ハ鯨ノ本字。□ハ俗字 鯨ハ鯨ノ俗字一
名□

鯨 海燕 海中鯨 浴□ 鯨魚 浮礁海龍王 已上蘭山ノ説 浮

而坐頭鯨最モ多キニ居ル。然レトモ百一・二ヲ取得ザル者也。主人曰、去冬ヨリ背美ノ来ル者五 六十頭ニシテ、十五頭ヲ漁シ得タリ。兎鯨ノ来ルモノ四 五十頭許ニシテ二十頭バカリヲ得タリト。簡以テ謂ゲンヤ、溟渤中ノ長鯨イカデ羨企スベキヤウモ無ラント。歳時数十頭ヲ漁シ得テ、富潤ヲ致ス。蓋シ又人ノ智巧造物者モ其籠罔ヲ逃

ルサル者有ランカ。此一條天保十年巳亥中夏
（天保十年五月十四日発足ノ記ハ

再遊シテ之記

書ニアリ

背美ハ頭ヲ擧テ汐ヲ噴ク故ニ道ヲナシ、上下、左右ニ分ル。坐頭ハ頭ヲ擧ズシテ吹ク故、一道ノ霧雨ヲナス。未鯤ハ汐吹一方ニ偏ル故ニ、其汐ヲ噴サマ直上スルアリ、前ニ向フアリ其高三間許リ。長須ハ最モ高シト云フ。潮吹ハ即鼻也。其形圖ノ如シ。

ハナバシラ
鼻 梁長一尺六寸 ハナゲキ
梁ノ厚一尺許

六鯨其形概相同シテ皆無鱗 細眼頭上ニ潮孔アリ、其ノ餘ハシヤ
チ

名セロイルカ、大魚クヒ名オキ
ゴト 等ナリ。亦皆潮竅有テ六鯨ヨリ

ク潮孔ニツアル者、汐ヲ吹テニ通ヲナス。又一孔ニシテ偏スルアリ。其潮ヲ噴サマ直上スルアリ。前ニ向フアリ。其高低同シカラズ。

六鯨中未鯤ハ或ハ上、或ハ下ル其餘ハ皆上ル。唯背美ハ春又下ルコトアリ。六鯨ノ中デ齒アル者ハ未鯤ナリ。其餘ハ皆エンバト云。エンバモ亦齒ナリ、唯是骨ニ非ズ。其莖質牛ノ爪ノ如キ者ニシテ、櫻毛ノ如キ長毛ノ有テ髭ノ若シゴト。故ニ又コレヲ髭トモ云。皆上顎ニノ

ミ有モノ也。

俗間鯨ノ筋ト云フモノ
ハ皆此エンバ也

背美七尋以下ノ背エンバ凡三百八十枚 七尋以上ノ背凡四百三十枚許リアリ

多

背美鯨ノエンバハ厚シテ長長サ二尺許ヨリ
一丈ニ至ル

器用ニハ
キモノ丈餘ニ及フ。色黒シ。
グ之ヲ用フ

坐頭鯨ノエンバハ振レテ甚薄シ、長一尺ヨリ三尺許黒色也。児鯨ノエンバ

ハ

甚小ニシテ白シ。エンバ皆大阪ニ賃製ス。細工
ノ用ニ尤ルナルヘシ

食料ニハ坐頭 背美ヲ上品トス。肥藏ニシテ味美也モ亦所在同シカ
ラ

ア

ス。其目モ亦多シ。「背肉 小骨サキ、赤豆肉アツキミ、背骨 小骨サキ物ノ湊
會ニ

ノルモ 赤豆肉 又サヘズリト云即手
也。背美ニアルモノ 豆腸等ヲ美トス。猶ト口百ヒロ腸
也 黒皮 尾

バケ カズラ骨アリ。其餘石ド本羽ノ本
ニアリ スノ咽也坐頭ニ
アルノミ 内肉膾肉也腸
肉ニアリ

臟腑

俣ツオミ脇肋ノ内臟府ノ間一等ノ諸品劣ルト雖トモ、亦下酒ノ一品一

スベシ。

諸鯨二其二、其死二臨テハ、皆声ヲ発シガ乃クトナクトナク鳴クコト雷ノ如シ山

ナリ。又背美鯨ハ常一鳴テ過ル。

鯨ノ陰器哺美ストシテ食ス。能ク泄瀉ヲ治ス。男子ハフケリヲ用テ、婦人ハタケリヲ用テ。

鯨陰莖ハ常二軀中ニ在テ見エス。其回ニ三尺、長三尺許之ヲ乾シテ

藥科トス。雌雄共ニ之ヲ取ル。雄ヲタケリ勢ト云、雌ヲフケリ牝ト云。俗門以テ藥飼ニ供ス。

鯨孕モノアリ其胎内ニ在ル子子ヲ帶行アリ、甚其子ヲ愛ス。其銛ヲ被三尋ニ及ブト云

手羽ノ下ニ其ノ子ヲ庇護テ其身ヲ愛ズ。然トモ若其子ノ死スルヲ見ルトキハ、決然トシテ顧ミス長走シテ棄テ去ル故ニ、漁者其子ヲ

獲シテ死セシメス。遂ニ母鯨ヲヲビキヨセ捕トゾ。噫祥生ノ其子ヲ愛スル天理ノ然ル者。其意実ニ悲ムベキモノナリ。

座頭 手羽長クシテ 銚ハカリニ六取得ガタシ。故ニ網ニマハセテ取トゾ。

一、坐頭鯨

背上ノ髭耆瞽者ノ琵琶ヲ負ニ似タリ、トテ琵琶負ビレト称シ、因テ坐頭ト名ヅク。前後ニ陰及臍 乳 鼻 耳 目皆具ル。汐吹ニ孔左右ニ在。其来ル九月ヨリ十月 霜月迄ヲ其候トス。網ヲカツガセ銚ニテ突キ捉。大抵銚七八

御献上

十本ニテ仕留ル。貢 ゴケンジャウ 物ニ供スルモノ是也。

一、背美鯨

冬至ヨリ春ニ 三月頃マデヲ其候トス。前後ニ陰及乳アリ、背美ハ鯨中ノ猛キ者ニシテ、銚百四 五十本ヨリ二百本許ニテ仕留ルコトアリ。又五六百

背美 皮黒シ。三四分白ミ、一尺餘モアレバ背ニ六八寸許ナリ

本モ入レテ取迹スコトアリ。銚其赤肉マデハ徹ラヌ者也。故ニ銚ヲ百モニ百モ負シ時、直下ニ海底ニ入テ轉身、一回スレバ其銚盡クハツレ落ル也。如此後浮ミ出ル時、亦数百ノ銚ヲ負ヒ、亦海底ニ入テ払ヒ去コト前ノ如ク幾度ニ

銛^{アセツ}。凡ソ五 六百ノ銛ヲ拂却シモダへ、^{アセツ}□テ卒ニシテセ船ノノ

事別二見ユ

ヲ断テ逸シ去ル。カ、ル魚ハ必ス獲ヘカラザル者也。又大底ノモノトテ其銛ヲ負フトキ、直一沈没シテ大底裏ヲ潜走スルコト三 四里許ニシテ浮出ス。然シテ其出ル處定ナキニ因テ、漁子彷徨トシテ度ヲ失ヒ、東奔西馳大ニカヲ費ス。背美ノ船ヲ碎クハ尾 手羽ヲ揚テ撃、又頭ニテ衝トキハ船輒碎ケル也。毎歳船ヲ破リ人モ間亦死ヲ致スニ至レリ。

背美ノ前額中ニ茶臼山トテ一ノ山 二ノ山 三ノ山ト云アリ。又左右ニ飛山トテ数々アリ。一・ニ・三ノ山ハ大サ一抱タラズ。之有生ナル時ハ能クヘゲル者也。花觚^{イケ} 筆 箸等ヲ製スベシ。飛山ハ書鎮 筆架 硯塀ニ用ユベシ。又鯨ニ着シ具アリ、鯨ガキト云。身ヲ拔去テ蓋置 墨台トナスベシ。

一、兒鯨

兒鯨トハ一種ノ名ニシテ、孩兒ノ兒ニハ非ル也。唯其名ヅクル所以テ知ラス。青黒色ニシテ白斑点アリ。是モ背美ト同ク、冬至ヨリ春末マデ其候トス。多

筋ハ銛ヲ以テ突取り、又網ニモカクルコト背美ニ同ジ 其大ナルハ九尋 十尋ニモ及ブ、大兒鯨トモ云

ヲ採製シテ木綿彈弓ノ弦トス。諸鯨皆筋有テ之ヲ取ル。兒鯨 背美ヲ上

トス。其大ナル者ハ回口尺許リ。

一、未鯤鯨一名ジャカウ鯨
蘭山ノ説

鼠色ナリ、其潮吹少左ノ方ニ依ル。春三月ヨリ夏ヘカケテ沖ヲ上リ、下リ
スル也。其性ヌルキ者テ、銛僅一十本 二十本ニテ仕留ルト也。其銛ヲ負
テ海底ニ入りシ時ハ、凡ソ三炊時バカリヲ經テ浮キ出ヅ。死シテモ他鯨
ノ如ク沈ゴトナシ。

末鯤ハ其味下品也、多ク油ヲ取り製ス。其頭上内ニ油有テ窪地ヲナス
也。

坡トナルモノ下ニアルモノヲトコトナス。其下タヲ千筋ト筋 綿弓ノ弦

其下タハ則油

之ヲ涌尽テ凡五十桶計每桶四斗
ヲ入ルヲ得焚カヘシテ燈油トシ四方鬻ク。魚灯ト云
灯セバ

臭

ア又其肉ヲ切片シ熬リテ魚燈ヲ取ル。其滓ヲイリカスト云。貧民食餌ニ充
ツ。其齒凡大小四十八本トスレドモ、四 五十或ハ六十モアルモノアリ。
有下顎ニ在テ上顎ニハ只食シメノ穴有テ、其穴ノ底ニ小キ齒アリ、之ヲ袋
齒ト云。齒ノ大ナルモノハ、重サ二百錢餘ル有リ。人以テ彫琢シテ懸垂ト
シ、或

ハ刃劔ヲ装シ及諸器ヲ製ス。姦商或ハウニコウニ也。ウニコウニ云誤也。ウニコウニ也。盤水夜活ニ見ユ。其説ハ六物

他ニツマビ

ラカ也 二偽造ス。其腸中稀ニ龍涎香ヲ得ルコトアリ

未鯤千百中稀ニアル者也。鯨ニハ曾テアルコトナシ。

赤羽根浦 今高知縣安芸郡羽根崎

草

俗ニ鯨糞又鯨粉ト云、

今宣シク之

ニフベシ

又シラワト云。

土州ニテハ白キヲシラフ、淡赤キモ

カフ、黑白相交ルヲコマフ云。本

啓蒙ニ見ユ。数書纂要ニ龍涎香ナシ、其氣近テ口ニ能発衆香ニ、故人ヲ用テ以香ニ和スト云。

ト其ノ煙直上スル眞ナリ、斜ナル者ハ眞ニ非ズ。又中山リウキウヨリ将来ノ線香ニ壽帶香

略クルアリ、焚テ其灰碎ケ落ズ。灰長ク巻由シテ女ノ字ノ形ヲナス。故ニ京師ニテ女字香ト

比香ハ龍涎香ヲ雜テ製スト言ヒ傳フ。以上蘭山氏ノ説略取スルモノ薬選ニ云フ。俗称海鱈ノ

糞者ハ即龍涎香一シテ、而非此物ノ屎。

鯨粉抹鯤ノ大腦中タマサカニ之有。其大サニ困許リ、外面皆屎ニテ重疊包裏ス。之ヲ洗剔シ去レハ、中又烏賊骨周匝粘着ス。又之ヲ刮去レバ、其

中ニ

小塊ヲナスモノ、即チ龍涎香ナリ重

一々目ニ及ブモノアリ。小ナルハ五寸者或ハ百者目ナルモノアリ

其色淡白或

ハ黒細膩ナリ。能ク血ヲ止メ痛ヲ止ム。オランダ 喘蘭人以香荅ノ料トス云。琉球国ヨリ来ル壽常香

ハ龍涎香ヲ雜或云、此物糞屎ノ類ニ非ズ、牛馬諸獸ノ鮎荅アルカ。如者マシテ製スト云

其所在一ナラズ。或ハ腹ニアリ、或ハ背中ニアリ、大小亦等シカラ陽中ニノミ之レアリ

一、鯨鯨 一名イワシ鯨

此魚好テ鯨ヲ追食ス。又其鯨ニ就テ松魚附添バ右等ノ名アル也。前後兩陰

及乳アリ潮吹エンバ皆坐頭ニ同ジ

一、長須鯨

鯨中ノ魅ナルモノ也。諸鯨モ八尋ヲ常トス。長須ハ曾テ十八尋ナル者ヲ漁ス。其尤長大ナルモノハ三十尋餘ニ至ルト云。此魚既ニ捕リ得力タキノミナラス、又多ク器械ヲ損亡スルヲ以テ、漁郎徃々之ヲ見ルト雖トモ、且ツ置ニ

漁セザル也。エンバハト云者ノ取ル是少シ廣シ坐頭ヨリ

附記

一、シヤチ 一名サカマタ

西國ニテタカマツト云。又名魚虎本章綱目魚類ニ魚虎アリ。コレト同ジカラズ 長一丈ヨリ一丈四

尺ニ至ル。黒色ニシテ眼上ニ白斑アリ。背ニ立鰭アリ。腹白シ。水族ノ兇
猛畏ルベキ者ナリ。能ク鯨鯢ヲ瞰フ、舟行人亦甚ダ之ヲ恐ル。實ニ魚中
ノ虎ト謂

者ベシ。海族中畏ルベキ者猶多シ、鰐サメ、大鯊ナド 其齒ハ上下ニ在テ、齧シメ好
能ク鯨ヲクラヒ、舟ヲ覆スコト有ト云

トゾ。魚齒中ノ上品ナル者也。其魚常ニ捕得カタシ。数年間稀ニ之ヲ得
ルコトアリ。故ニ其齒貴ク且ツ稀也。

一、クロ

長七 八尺、背ニ立ヒレ□アリ

一、イルカ

海豚魚ナリ、種類多シ。長七 八尺、背ニ立ヒレ□アリ腹白シ。其嘴細長ク、
牙齒相連ル。俗ニイルカノ宮詣トテ、其行ク時隊列ヲナスト云フ。此事詳
ナラズ。

一、大魚喰 一名沖ゴト

大魚喰 齒モ同ジク小ナリ。其數合セテ四十五 六本 其大ナルモノ三寸許 小ナルモノ一 二寸。

長一丈ヨリ一丈四 五尺ニ至ル。背鳍立ちテ後へ下ル。背スジ横腹 下腹
共ニ淡白間道^{スジ}アリ。齒上下ニ在テシヤチノ如シ。汐竅半左へ倚テ、形半月
ノ如シ。

一、ゴト 又ゴンドト云
渚魚

長大大魚喰ニ同ジ。脊鳍後へ向フ、アミ笠ビレト云。齒アリ其質シヤチノ
齒一似テ甚小ナリ

以上皆黒色無鱗ニシテ、前後両陰 臍 乳ヲ具シテ胎生シ潮孔アリ。其形状
モ亦大同小異ニシテ、鯨属類ナルモノ也。又北國ニテド鯨ト呼モノアリ、鯨
ノ類ト云。八丈ニテ翁鯨ト云者ヲ取ル。是マツコ鯨ナラント云フ。

鮫魚ノ類ハ 一胞数子アリ。六 七子或ハ 十子ニ及ブア 鮫ハ 汐吹ナシ、^{スカ}鯨魚モ
亦サメ類モ同ジ

サメフカ品類殊ニ夥シ。蘭山氏曰 皆胎生ナリ数品アリ 一胞一子云々又一胞数子ナルアリ

潮 候

海潮八月ノ高低出入ニ随テ盈縮^{ミチヒ}漸暴アル者也。故人ノ云ヘル地氣
ノ喘息也トハ然ラン者也。今コトニ云フ所ノ其ノ潮汐消長ヲ謂ニ非

ス、海水中所在前ニ一條ノ潮流ヲナシテ、上下疾徐時ナキモノヲ謂也。

燈明崎ノ海潮ハ一日ノ中ニ変リテ、或ハ上リ、或ハ下ル。下リ潮ヲ真潮ト云フ、網ヲ置クニ宜シ。上リ汐ヲソコ汐ト云、網ヲハルニ宜シカラズ。

梶取崎前ノ海面ニ暗礁アツテ海淺シ。網ヲ下スコト凡三、四十尋ニシテ礁ニ達ス。於是潮流ノ疾徐ヲ候シテ網ヲ下スコト也。故ニ爰ニ網代称ス。潮ヲ候スルノ法、繩ヲ以テ石ヲ墜リサゲテ之ヲ見ル。石重サ

六十匁許、直下ニ下ルハ潮ユルキ也。則網船中ノ船ニト幟一本ヲ

ツ。若シ斜ニ流ルゝ時ハ、石ヲ添へテニツ下ル。其時ハ又別船ニ幟ヲ立

ツ。若シ猶旒ニ流ルゝ時ハ、石三ツモ、四ツモ加へ下ケル。石ノ数ニ應ジテ船ゴトニ幟ヲ立ツル時ハ、潮疾クシテ網ヲオカレヌコトヲ知

ルナリ。

真潮ニハ白幟ヲ立ツ、ソコ潮ニハ黒幟ヲ立紀ノ字ヲ白看司潮候ヲ見

上ガリニス

テ煙ヲ揚テ、沖ノ諸船ヲ下知スル也。

燈明崎ノ一番潮ハ六・七里沖ニアリ、然トモ巽風ニハ地方々近ク依(倚)

ル。ニ番潮 三番潮ハ洋中二十餘里ニ在リ、潮ハ寅卯ヲ指テ流ル。

燈明ノ沖ニモ暗礁有テ、其礁南ハ平ニ・北ハ險シ。故ニ下リ潮ニハ礁

ナゾヘナルニ因テ網カヽラズ。上リ汐ニハ礁ニセガルヽ故、網カヽ

リ伏テヲカレヌ也。

御崎ノ下リ潮ニ燈明ハ上ルコトアリ。御崎ノ潮ハ大洋ヲ行テ、北東

ヨ

洲燈明へ廻リ上ルコトアレバ也因ニ記ス 潮ノ御崎ハ南溟斗絶ノ豊秋津

境其海上ニ突出スルコト四十町

ノ南盡頭ナリ。此土少彦名命ヲ廟祠ス燈明崎ヨリ海上四里許リ、申ノ方ニ

ル。日本書紀ニ曰少彦名命行至熊野

當

之御崎遂適於常世郷矣

之印其幽宮ノ地ナリ 洋船人ノ信詣スル所也 又御崎ノ潮候トテ舟師

少慎ム所也。幅二里許之ヲ一番潮ト云^ニ番潮ハハル 其潮或ハ上リ、或

カノ沖ニアリ

上ル。或ハ疾ク。或ハ徐シ、定度ナキ者也。沖ニ至ル程潮勢ツヨシ。故ニ洋船ハ磯手ヘ寄ル。其潮流ノ末ハ八丈辺ニモ及ブト云。八丈島ハ極量三十二^ニ三度ノ地ナラン。サレバ卯辰ニ當ルベシ。

此地海上^ニ一里餘所ニ一大暗礁アリ。廣裏十里ニ亘ル礁上ハ、深サ五十五尋餘^ノ所^ヲ近ハ八十尋、其礁ノ状西面ハ險山截ニシテ、東方ハ平衍ナリ潮流ノ中道ニ當ル。是故ニ大抵下リ潮ハ激シテアラク、上リ潮ハ穩ナリ。然トモ潮急ナル時ハ、上リ下リ共ニ奔端ヲナシテ瀧ノ如シ。其潮ヲ渉ル者櫓一挺ニテ押シ絶ル^ルヨ一挺絶ト云。二挺ヲ二挺切 或ハ五挺切 八挺切ナドト云フテ、其緩急ヲ察知スル事也。

御崎ノ潮年ヲ経テ上リ又年ヲ経テ下ル故之ヲ片潮ト云

潮候 一月中ニ変ルコトアリ、又数年上リ数年下ルコトアリ。上リ潮

ヨリ下り潮カ久シキヲ覚フ。往歲上り潮九年ツトキ、下り潮十八年ツトキシコトアリ。又休潮トテ潮ノタユタフコト有リ。潮ノ緩ルヨラヲイタ

云ト云。上り潮ニハ漁事少ク潮上レバ漁船七里餘下り潮ニハ漁事多シトモ沖へ出テ漁スト云

右御崎潮ノ一條ハ、其祝ハフリ氏潮岬但馬子ニ聞ク所也。

號令

号令ノ條曰 亦多端ニシテ一茶話ノ盡ス所ニ非ル也。此ニ聞ク所ノ一・ニヲ擧グルノミ。

一、相圖ハ旗ニ螺 采及号煙等ヲ以テ候吏ツノ下知ヲ司ル。都テ相圖ノ時ハ螺ヲ吹ク

ヲ、大采ニツ長竿ノ 小采ニツ皆紙ニテ作ル 小采ハ網船ヲ不知シ、大采ハ勢子船采也 シデ也

下知ス

一、小采ヲ両手ニ持テ、左右へ開キ擧グル。是レ網ヲオケトノ下知也。

一、小采ヲ両手ニ持チ、左右ニ振り上ゲ中ニテ合ス。是ヲ船ヲモヤヘトノ下知也。

一、采ヲ片手ニテ高クサシ上ゲ見セル。是レ下地ニ因テ漕行船ヲ鯨ノ様ニ因テ留レト下地シ、或ハ網ヲオキカケル時様子有テオクナトノ下地也。

一、網ヲオケト下地ノ大采ヲ突立テ居ルハ、網ヲ一重オケト也。

一、大采ニ小采ヲツリ付ケ立ツルハ、沖ノ勢子船へ網ニカマハズ鯨ヲ追力ケテ突トノ下地也。

一、夕陽ニ及ンテ鯨逃ケノブレバ、螺ヲ吹キ采ヲ振テ、網船ノ碇ヲ上ゲシム。

一、魚来ル時 諸方ノ洋クワイセン 船有テ、纏標ヲナス時ハ鯨能ク帆影ニ驚キ去ル者也 漁船小記字ノ幟 紀

ノ字ヲ白アガリニス。 ヲ採テ、左右へ振り分テ之ヲ避ケシム。或ハ筵ヲ振りテ之ヲ示

或ハ大船ノ邊ニ避ケガタキ者ヲ見レバ、看司筵ヲ振テ諸船へ之ヲ外洋へ引去ヨト下知ス。乃チ諸船廻船へ漕ヨセテ、繩ヲ其船へ授與へ引曳シテ海表へ漕ノケル。

一、号煙ニ南ノ竈 北ノ竈 中ノ竈トテ煙ヲ上ケル處アリ。沖ノ漁船南ノ煙ヲ見

南バ、燈明ガハナノ中ニテ網ヲオカレスコトヲ知テ返ル灯明ノ下ニテ網ヲカケルヲ前ガケト云 又

北両方ニテ同様ニ煙ヲ上ゲル時ハ、諸船眞スグニ沖ヲ指テ漕出ス。若シ煙一方薄ク一方濃ケレバ、濃キ方ヲ目アテニ漕行ク。又一方消レハ一方ノ煙上ガル方ヘ漕グ。沖ノ船ヲ召ブン煙ヲ上ゲ、或ハ南或ハ北ヘト下知ス。

北ノ竈ニテチヨツ乍ト煙ヲ上ゲテ消シ、直ニ中ノ竈ニテ煙ヲ上グレハ、北ノ地番斥候船ヲ沖ニ出ス也。又南へ出ダスニハ南ノ竈ニテ煙ヲ上ゲル。南ノ船ヲ北へ廻シムルニハ之ニ反ス。黎明前ノ相圖ハ炬火也。炬火ニツヲ燃スハ網ヲオケトノ下知也。

財、諸船鈔等ノタラヌ時ハ、筵嶋ヨリ灯明ノ螺ヲ吹采ヲ揚ゲテ陸手ヲ招ク。

下ニアリ

于大納屋ヨリ道具船ヲ乗出ス。

器 械 部

器械ノ品製名目等巨繁ニシテ一席ノ談ニ非ズ、爲ニ一書ヲ編ミ非レバ恐ラクハ盡シガタケン。茲ニソノ端緒ヲカイ摘デ、其大綱ヲ記スノミ。

船

漁船凡ソ数十、皆海鯨船ト称ス

宗史ニ官軍以ニ海鯨船一衝レ敵船皆平沈ス 又水滸傳ニ高口造ニ許多太船一
名田ニ海鯨一其大数ニ倍尋常戰艦コレ等ノ海鯨船ハ巨大ノ義ヲ取テ名ツ
クル者也 海鯨ヲ漁スルノ船ハ非ル也

一、勢子船十六艘

船ゴトニ櫓八挺ヲ立ツ、十五人乗也。一番ヲ沖合ヒト云、二番ノ片沖合
ト云、次ヲ三番 四番ト次第シテ十六番ニ至ル。此一・二・三迄ヲ困ト云
フ。此

速三艘ハ漆又リ也。皆代船有テ都テ六艘也 三四十日目ニハ乘リ代ル。是レ其輕

ヲ取ル爲也。每船着色ノ模様有テ、之レガ次第ヲ兮他船モ亦然リ 沖合ハ一番ニ乗

番 出テ退後ニ返ル。一・二・三共ニ大洋ニ出ル。其羽刺ハ又ギカケ也右祖也 四

ヨリノ刃刺ハ裸也。

一・二・三ノ早銚ヲ入レテ後ニ、只シラセノ下知ヲナスバカリ也。此刃刺
ハコウシヤロウコウ諳練老成ノ者ヲ撰ム。シラセトハ銚ニ長繩ヲ結付テ、鯨ニ突立其繩ヲ持

テ、鯨背美ノ海底ニ入り、狂フニ尾從テ其繩ヲ延シツト、若シ足ス時ハ他
船ヲ招テ繩ヲ継ギ足シク、或ハ遂ニ四百尋ニモ及ブ。斯テ刃刺ハ櫓梢ニ
立テ、小采ヲ以テ魚ノ行衛ヲ指示ス。之ヲシラセ船ト云フ。

一ノ船早鋸ヲ入レタル時ハ鋸ノ幟ヲ立ツ、二ノ船ハ淺黄色也。三ノ船ハ黄
二

色也。其餘ハ白布ノ大幟ナリ 両方カキ色
中白ナリ

一、持左右船四艘十一人乗也。内二艘ヲ假特左右ト云。假特左右船ハ手形
切ノ貫シ来ル繩ヲ船ニツナギ付ケ、双方ヨリ大鋸ヲ突立、数多巨索カニスヲ廻
ニ入レテ、鯨ヲ中ニ縛トメテ漕也。又假持左右ハ其後ニ連テ同クニ行ニ並
へ漕ク。是レ鯨不圖狂出シテ、先キノ持左右船ヲ碎テ、魚即チ沈ムコトア
リ。其時假持左右力ネテ其用意ナレバ、直サマ代テ鯨ヲ持チ留テ沈セヌ
也。持左右

船八頭ノ茶筭ナク 艚首ノ
飾リ也 両方ノ五尺ナシ 横括
ナリ

磯、網船十一艘櫓六挺ヲ立ツ 艚先ニ二丁
舳ニ四丁 十三人乗也。八艘ハ沖へ出テ、餘ハ

手ニ備フ。船ノ次第ハ一・二・三・四・五・六・七・八・九、いろヲ以テ之ヲ
分ツ。

網船返ル時ハ濱手ニ繫ギ置ク

是亦其一・二・三ヲ網船ノ沖合ト云

他舩直ニ沙上ニ昇置

一、樽船一艘十人乗也。樽ト桐ノ木トヲ以テ網ヲ浮子トス。魚ヲ網スルニ當テ、其綽ウケツナ綱繩切レテ流レ散ル。因テ之ヲ拾フヲ事トス老漁者ヲ乘ラシム。

一、魚殺舩ハ四艘也。何レノ舩ニヨラズ、強壯ノ者ヲ撰ム。

一、道具舩

一、櫓各々名アリ略之 表櫓ヲハツサキト云 ヲモ舵トリ舵ハ両ハズハズハキヌ

サキト云

旗 幟

旗 幟ノ製亦数様アリ。唯圖ノ喩シ易キニ若ガザルヲモテ、圖記ヲ後ニ附ス。是モ亦一時聞ク所ヲ記スル者ナシ。疎漏多カルヘシ。旗幟ヲ品数モ亦此ニ止マラジ、覽者幸ニ其意ヲ會シタマヘ。

銛

銛 急廉切 又ヤスト云。一名又鋼銛 鋼又 魚又 逆鬚鎗 頭捕魚鎗

□ モリ 字書此字ナシ俗ノ會意ナルベシ 銛ハ漁具ノ第一品陣中ノカケボウ戈銛ナル者也。

銛ノ字ヲ用フルヲ正トスヘシ

小ヨリ大ニ至ル、大ノ極ヲ劍トス。劍亦大中小ノ製アリテ、各々其用ニ應ス。皆黒鉄ヲ以テ之ヲ作ル。黒鉄ヨク魚肉ニ入り、且ツ柔靱易キヲ取ル。故ニ鋼鉄ヲ用ヰストナン。銛ハ魚肉ニ立ハ直ニ銛頭ヨリ横ニシナヘ折レル。

銛ヲ用ルコト凡テ數百千數ニシテ其亡失スルモ、亦半バヲ過ル者也。

漁漢ノ銛ヲ使用スル。大抵四、五間口ニシテ擲刺ニ撞コト也。然レトモ間ニヨク投失フ者也。故ニ銛百本ヲ投シテ三十許ヲ留ルヲ可トシ、四十モ留ルヲ上トス。大劍ハ之ヲ空中ニ蹴テ、直ニ翻テ下リ剩ス。混ト近寄ヲ刺コトナレバ失サヌ者也。

每船銛二十餘枝ヲ載ス。又劍小中大三霸ヲ載ス。銛若シ足ラサル時ハ、相圖ニ因テ大納屋ヨリ道具船出ス。

大納屋ハ諸器械ヲ蓄藏シ、且ツ製造スル所也。衆土ソノ各舎ニ居テ、專ラ修作ヲ事トス。

一、早銛

銚ノ尖一尺一寸ミガキ也 地ハダ七 八寸許 重サ四十目位。棹長一丈二尺

寸 矢繩 十三尋重サ、カズラ 葛繩 十二尋 付也。

一、指添銚サシ

製法同上 以上ニツノ銚ハ、猶弓ニ早箭ハヤ 乙箭有ガ如キモノ也。ヲトヤ

一、下タヤ平銚 同上

諸銚ノ製大口如、此ニシテ漸ク大ナルニ至ル

一、角銚

銚身重サ百五十目、柄ハ樫ヲ鋸解ヒキワリ、ソノマヽ一寸二分角ニ作ル故ニ角銚ト云

長一丈一尺五寸矢繩 十二尋重二百目 葛繩輪付也

一、中銚

身重サ百三十目、桿 皮付ノ丸木ヲ用ユ。長一丈一尺、矢繩ナシ突捨ナリ。

一、栓銚

身重五百目尾ニ錨アリ、鑲付也。クワシ 竿ハ樫ノ割木丸ケヅリ。長八尺五寸、

大芋索付 カズス十八尋 柱ハ帆柱ヲ用ユ檣也。長三尺本三丁經 索端ヲ柱ニ釣

シ、

重一貫五百目

三寸

銛ヲ魚一刺立、直ニ柱ヲ海中ニナゲ込ム也。

一、萬銛

身重八百目、鑲アリ柄口ハ皮付ノ丸太也。廻一尺長一丈芋索付也。カ、ス

三條ヲ以テ相連結ス。其一ヲ根芋トス

七尋重サ七百五十目

其二ハコキ芋ソ

五重尋重五目

用

其次ヲ三番カビスト云

キソニテ十八尋重サニメ五百目

鯨ハ九分仕留タル時、沈スマジキ

心ニ此銛ツ、突立ツル也。

一、劍

両刃ニシテシノギ両脊稜其製大中小アリ

大劍 身重ニメ六百目、次ハ一メ八百目

中劍 一メ二百目

小劍 八百目ヨリ一メ目ニ至ル。其大サハ身長三尺二寸許リ幅四寸、

其中小ノ長短ハ其重サニ準シテ知ルベシ。口柄長七尺五寸、シナヘル櫛ノ割木ニテ

丸ク削リナス也。劍頸ハ大ニシテ漸ク殺シテ末梢ニ至テハ細シナヘル鞞事細竹ノ

如シ。鑽イシツキニ留リ有テ繩ヲ結付、之ヲ劍引ト云。

刃刺其繩ヲ手ニ持シテ、連ツツケサマニ魚ヲ刺ス、劍ハ切ルト唄、テ

一、留刀銛

身重百六十匁、鑲アリ、カヽス十七尋半 竿八角銛ノ竿ヲ用ウ。此銛ハ

魚ヲ劔ニテ切留メシ時、魚ノ頭重付目へ突立テ其繩ヲ持、左右ノ間ニククリ繫付ケ

テ漕グ也。

一、手形銛

手形キリノ足カヽリトナス也。

網

網罟ノ利廣大ニシテ漁具ノ要具也。殊ニ鯨網ハ尋常ノ比ニ非ズ。姑ク聞ケル所ヲ記シテ、目次数ニ充ツルノミ。

一、網

大田帶ヲ用テ作ル カヅスモ 同様 椎皮ヲ煮テ之ヲ染ル

ナ 網一條十八反其目ハ立テ通行スヘシ。脚ニハ古網ヲ用脚ヲアシバラ又 網イ墜サ

シ

其一反ノ大サ横十尋 縦三十尋 四十尋 重二十貫目 浮子ノ樽三ツ 斗^四

桶ヨリ少バ^{十許} 杉ニテ
シ小ナリ^{作ル}

アバノ目 巾八 九寸
長二尺七 八寸 厚サ一寸二分許

梶取前ノ網場ハ、其礁山^{ハエ}手ハ淺ク沖ハ深シ。故ニ網ノ下^{サガ}リ山手ニテ
ハ二十五尋 次ハ三十尋 沖ハ四十尋ナリ。

器械ノ数豈其レ此ニ止マランヤ。況ンヤ其凡百ノ事件山積堆墨煩
擾モ亦甚シ、固ヨリ枚擧ニ違アランヤ。爰ニ千百ノ十一ヲ存スト
云。

大地 桑 組合
海西 勢子 郷ヲ 布列 スル 図

沖

南

□ ハリタシ

○ ハリタシ

□ 小南カネ

小南

□ カネ

□ ワリバン

○ ワリバン

○ カネ ○ ニバン

□ ニバン

□ ハンバン
一ダツリ ○ ハンバン

○ アジロバン

□ 中ノリ

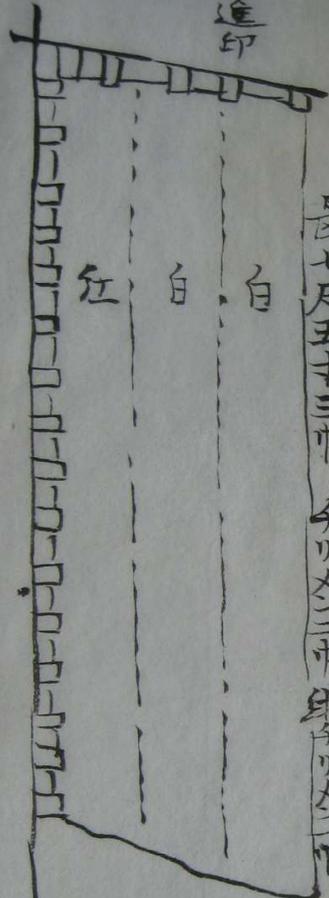
□ 中ノリ

梶取崎

灯明崎

障子

注進印



長七尺五寸三巾 子リメンニ巾 緋子リメン一巾

カキ色ハ山字深トテ
地際チ赤ニシヤシ
里下ヨミアリ
又ベンカラミテモ染ル

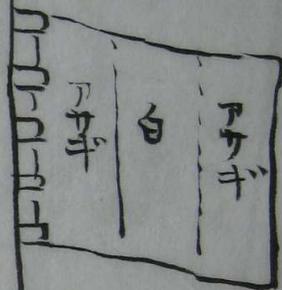
長三尺三巾



田三艘共ニ此感ヲ載ス
餘ヲ任留ルトキ立テ注進
スルナリ

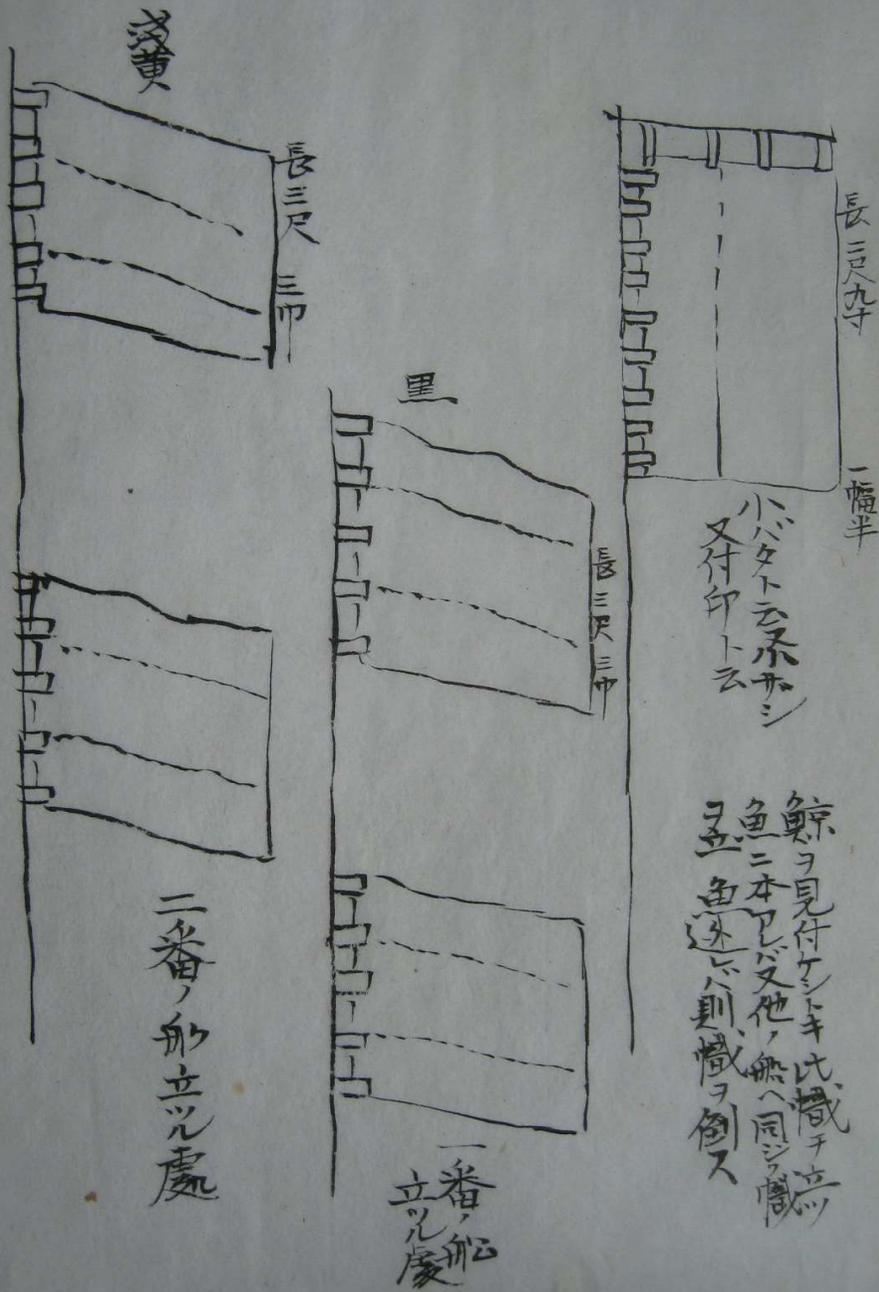
四番以下各
此感ヲ立

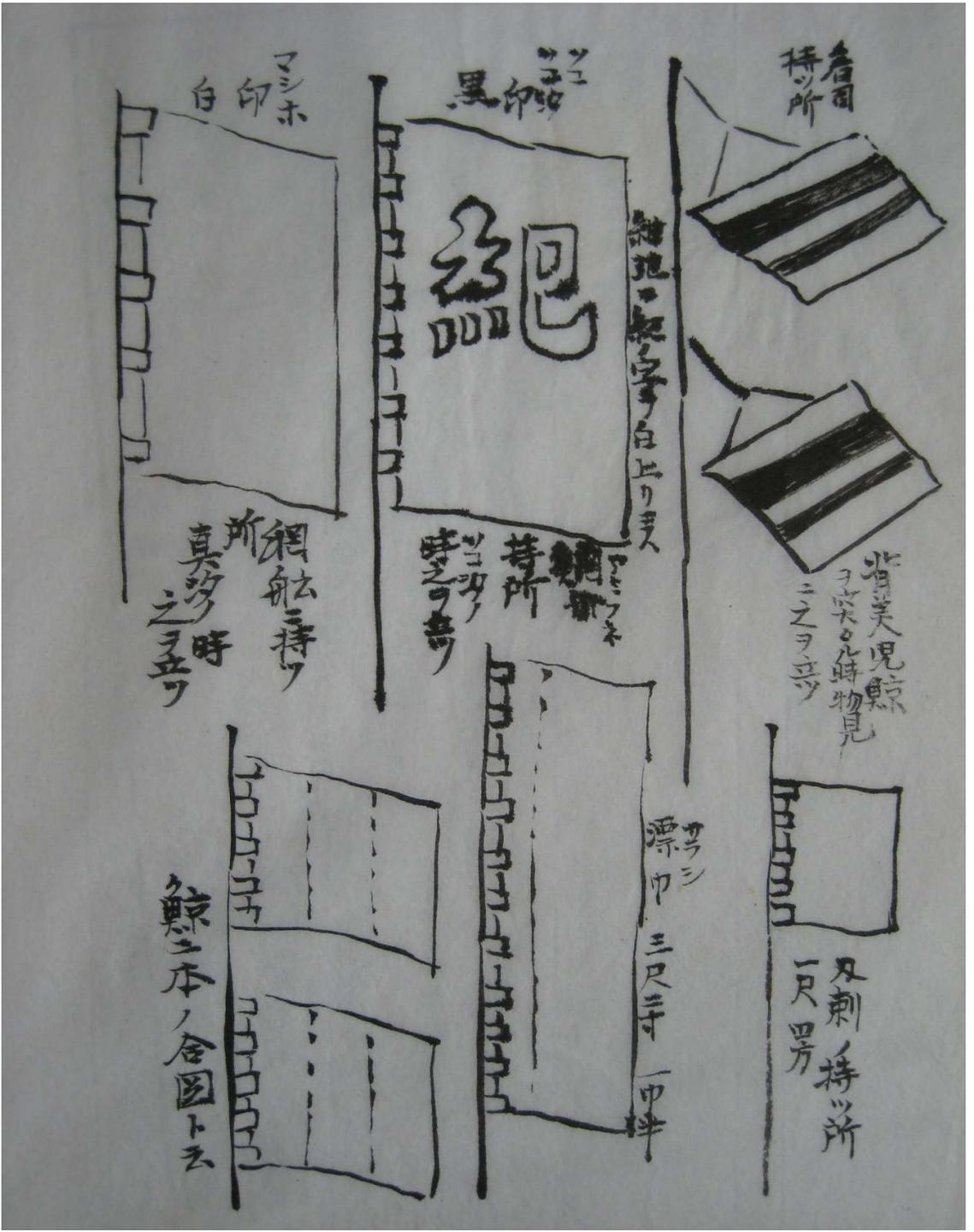
長三尺
三巾



三番船立之所

旗之圖





白印
マシホ

黒印
ツニ

春司
持所

紀

紀地・紀字・白上り

所
網船持
真夕時
之ヲ

持所
ツニ
時之ヲ

省美見鯨
ヨミ
ニ之ヲ

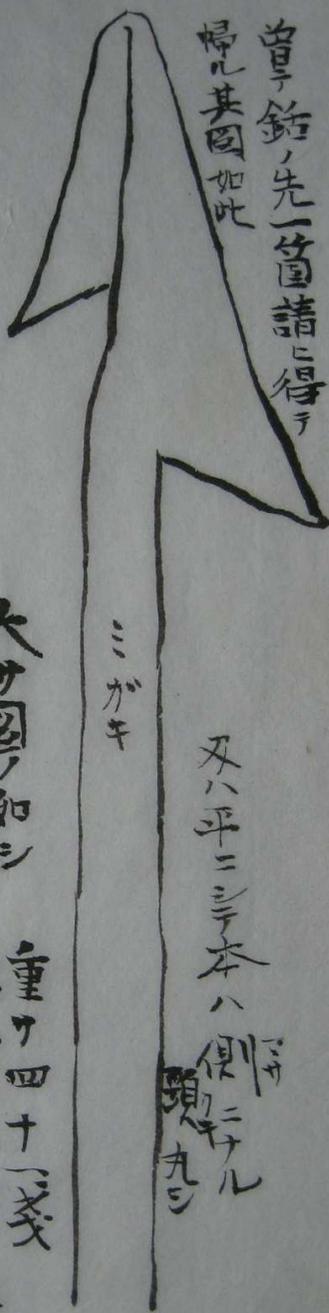
カサシ

三尺寸一巾

鯨之本ノ合圖ト云

及刺持所
一尺四寸

曾テ鉛ノ先一箇請ヒ得テ
帰ル其圖如此



ミガキ

又ハ平ニシテ本ハ側ニナル
頭丸シ

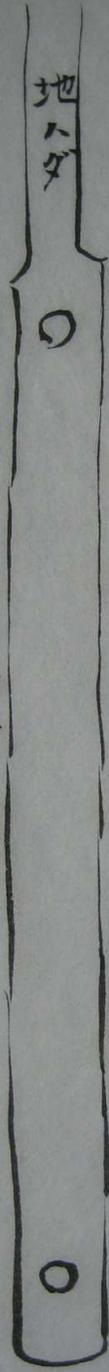
大サ圖ノ如シ

重ク四十一匁
惣長一尺八寸三分

地ハダ

是ヨリ平アリ

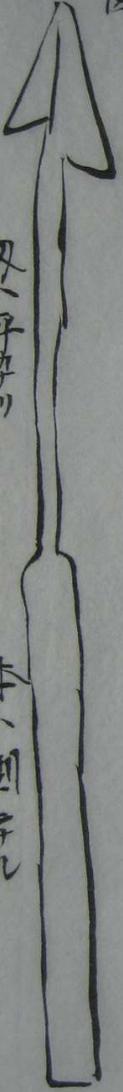
四寸五分



全圖

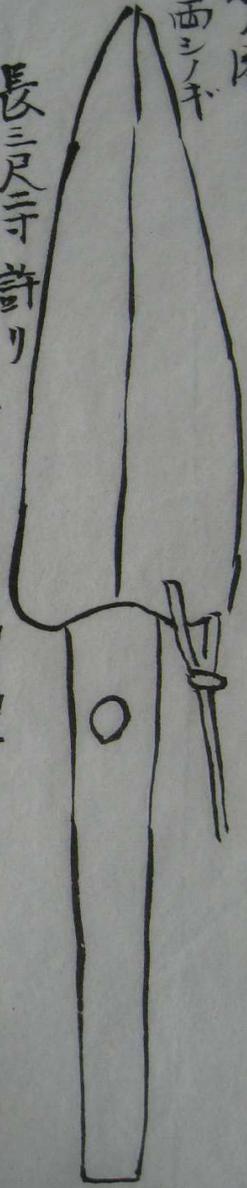
又ハ平ナリ

本ハ側ニナル



大劍ノ図
諸刃西シキ

長三尺二寸許リ
重サ二母貝五百目
中四寸



檜
徑割木丸ケカリ
七尺五寸

劔ビキ



坐頭鯨ノ肉中ニ在リシ者

石罫ノ図

蒼黒色ニシテ

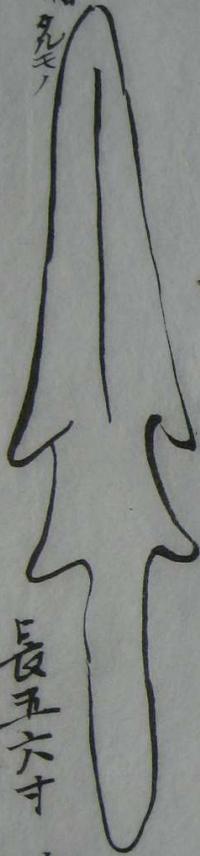
暗紋アリ

寛政十一年己未
十月廿三日得鯨肉一
（坐頭）

是亦鯨ノ肉中ニ得ル矢ノ根 骨トモ石トモ
水トモ分子ガタシ 蓋骨ノ骨トモ云（色白シトアリ）

年見不詳
見鯨ノ

体中得
丸モノ



長五六寸 中三寸許

長三寸六分 巾一寸

重九匁

海鱮說答人

一、書中海鱮ノ說

盡出于傳聞之訛、其註亦未悉之夫海鱮打捕之法最多端、而費用不貲利亦大矣。且官有制額、漁有定所、而吾郡太地浦之名最著焉、余嘗遊其地、周旋經日、質問得實、今請陳其略、且以補正其說、鱮族凡六、而那賀爲大背美爲猛、其長三、四尋至七

八

尋者爲常、太地浦嘗獲那賀須十有八尋者此其最大者云

一書中曰十有八丈

者或謂此那又曰或有長大至二十尋者其來各其候也。沙戶計其長短以幾尋々四也。

此以曲尺一尺二寸爲一尺者、四尺即當曲尺四尺八寸

俗間鯨尺之名或本千此耶

大抵海鱮漁船少觸之輒即破碎故、漁于後先投機旨十步外飛鈎刺之。鈎有大小數樣、各適其用、其臨漁時、乱發數十百鈎、或至二百餘鈎方纔殪之、鱮則雷吼掉脱、痰甚苦氣絕則論不可復

得 故候其氣息少存、巨索數條帶榮其腹下、欄住令不沈、於是
數船分隊、左右次第挾持紮定、至岸牢割之、故海鯧難？小者、非
數十之舩、數百之衆、不能獵取也。又如那賀須垂往々遇之、看
過而戀也、可以想見其壯大不易制御也、已其曰長四十丈、又
曰

就割其内而知者以告者過也、又有称虎

本草魚類有魚
虎與此不同

又名シヤチ長

一丈至一丈四・五尺、能瞰海鯧実魚中之虎者、其所謂大魚者
或是耶、嗚呼海鯧海族中者之巨魁、漁事亦浩繁豈其短楮所能
悉、因舉其大較、聊備千覽、名其詳說、有鄙撰一書、請後賜覽
焉

和詩七律

漁鯨行

和ワ田ダ津ツ海ウ面ミにモ浮フつ沈シんズ

鯨の品も数多とし多く

よしや出刃には身を果すとも

儲隊千群をふみたて

一舉莫金資を染なす

やをら細工に名をハ留めぬ

雲捲波のあいや見多まへ

残處なき料理かたなる

同 前

さも涯りなき蒼海原に

又類なき魚とし多^(セ)り

鰭をあげては山と頭はれ

潮を噴^(揚)ては雪を翻へし

銛^(ヒネツ)を捨て刃刺の備へ

船を飛はして諸手^(モロテ)の困ミ

すは大獵の幟勇ましく

七郷はさて四方賑はひ

文政十一年戊子九月十月霜月

南行録目録

測主禮述

九月小二十八日 新宮着 小川屋

十月六日 新宮ヲ發ス

六日 濱ノ宮泊リ 當社屋宇兵衛

七日 太地 和田金右衛門

八日 高芝 内海屋惣衛門

九日 御崎 潮崎但馬

十日 古座 八幡屋孫兵衛

十一日 太地 和田氏

十五日迄

太地滞在

十六日

新宮

小川屋

十八日

帰宅

同十一月三日

同是村二到

西宇平次二宿

四日

帰宅

十月二日 新宮菴主ニテ寶物拜見大略左ノ如シ

一 無言抄 小本二冊寫本 和歌ノ書也

標題二枚ハ嵯峨天皇宸筆ト云

一 法華識法 菅丞相筆ト云

一 梵字法華經 八卷ナリ 紺紙金泥中将姫ノ筆ト云

一 法華經 淺黄地金泥 弘法大師筆 全ハ慈覺大師筆ト云

一 極細字法華經 一卷八卷全部也

一 大乘妙典 八卷一範[?] 東福門院筆ト云

一 天竺多羅葉 二枚

本ト一枚ナリシガ中折テ二枚トナル、幅一寸^三四分、長各一尺^三四寸、本ト未分ラズ。色白クシテ其形状ビロノ葉ニ似タリ。

両面ニ文字アリ四行也。和蘭陀文字ニ似テ横文字ナルベシト

云。 針ノ先ニテ書キシモノニ似タリ。字ハ黒ク見ユ。

一 印子金ノ鈴 金色アカクシテ音甚ダサヘタリ

一 小机 一脚 惣金梨地 モヤウ松竹梅 高五寸許リ

一 小色紙 一箱 金ナシ地

一 硯箱 同上

一 香箱 同上

一 香箱

一 短冊 四枚 聖護院宮筆

一 太閤秀吉公ノ四ツ椀

外黒内朱甚大ナリ 紋五ツ 金ナシ地又リ分也

内小椀ニツハ糸シキニ紋アリ、蓋ニスルカ爲ナラン

一 太閤政所ノ衣裳 百地^{シロ}ニ所ニ縫アリ

縫ハぬいつぶしノ物ニシテ縫ノ内ニ桐ノ紋ヲ縫入レタリ。此
紋モ椀ノ紋ノ如ク色ヲ縫ヒ分ケタリ。打敷トセリ。

一 翁ノ面 枚ノ木ト見エ、粉色^{イロエ}處々ハゲタリ。下顎ハ別ニシテヒモニ

一 牛^{ウシノ}黄^{タマ}

テトヂタリ。鬚ハハグマノモノト云。金鼠色ニテ光有リ、春日ノ作ト云。

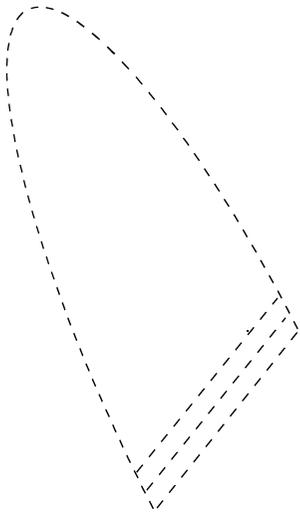


大サ
如圖

本ト鼠色也 後灰ノ中へ
落セシトテ今色白ミアリ

一 天狗ノ爪

天狗ノ爪石ナルベシ
手ノ爪色ニ似テ
光リアリ



此處黒茶色ノ石ナリ
スベテ内ハ石ト見ユ

一 駒ノ角



色赤黒シ

一 目貫一對 後藤祐乗作ト云

紫銅ナリ 方盤二枚重ネ

一 大簪 後藤祐乗 金ニテ立浪ノ彫モノ一ツ有

一 太刀 無銘 白ヲ木鞘ニ入ル

左文字ト云 長二尺三寸餘 大ミダレヤキ

彫物 外ニ クリカラ龍
内ニ 八幡大菩薩

一 脇差 同上

廣改ト云 長一尺七寸餘 スダヤキヒタテツラ

彫物 外モ 内モ マリカラ龍 □ ほんじ 摩利尊支天 □ ほんじ ↓バン(大目)

繩切丸ト云フハ是也

右太刀ハ重ネウスク、先キスガレテ地アレチラクアリ
小ハ大刀ヨリ丈夫ニ見ヘ、地アレモナシ

右大小共ニ研ヘラレタル物ナルコト、文字ノ處ニ見ユ

一 三幅對 絹地大幅モノ甚古シ 釈迦 文珠 普賢ノ彩画也 落款

・印章共ニナシ 牧溪ノ画トイフ

右ノ外猶多シ略之

書籍御蔵書ノ類ハ數十通アリ 足利將軍義輝公台徳院殿

浅野但馬様同右近様 其外数タアリ

十月六日 新宮ヲ發シ廣津野ニ至リ三手洗ノ濱ニ出デ、小岡ヲ越

テ

主輪崎ニ至ル

新宮ヨリ
一里

磯づたい松原ヲ過クチ黒ノ
石ヲ拾フ

橋ヲ渡リ磯

たい宇久井ニ至リ 右山手ニ入り土橋ヲ渡リ、小クジ坂ヲ越

ヘテアラ磯ニ出デ 又大クジ坂ヲ越エテ土橋ヲ渡リ赤色ニ至

リ 小阜ヲ過テ濱ノ宮ニ宿ス 八ツ半時也

三輪崎ヨリ宇久井へ

宇久井ヨリ濱ノ宮へ 五十丁

赤イロヨリ濱ノ宮へ 十五丁

濱ノ宮ヨリ那智山鳥居迄 五十

丁

濱ノ宮ヨリ天満へ 四丁

天満ヨリ勝浦へ 八丁

勝浦ヨリ太地へ海路一里

濱ノ宮ヨリ太地へ陸路三里

六日濱ノ宮當社屋外兵衛ノ宿

七日 勝浦ヨリ船ニノリ太地ニ至ル 舟賃貳百銅 和田金

右衛門ニ宿ス

是ノ日燈明ケ鼻ニ往キ 始テ鯨ヲ取ル様子ヲ見 又鯨ノ潮ヲ
噴ヲ見ル 鯨ハ網ヲクヰリテ逃ゲ去リタリ

八日 太地ヨリ小山ニヲ越エテ下里ニ至ル 太地ヨリ高柴へ

二十五丁 橋ヲ渡リ又高芝川ヲ舟ニテ渡ル 即高芝ナリ

時八ツ頃ナリ 八日高芝ノ内海屋想右衛門宿 宇右衛門ト
モ云

九日 高芝ヨリ六丁粉白浦ニ至リ 與平次ト云一小字アリ

好事ノ農夫ニテ 玉ノ浦ノ玉石又ハ玉ノ胎メル盆石ヲ数々蓄
へ置ケリ 就テニ三乞ヒ得タリ 其次ノ一ト浦モ粉白ト云

一農家アリ吉藏ト云 誠ニ立寄リテ玉石ノ拾ヒ置キテンヤ

ト問ヒケレバ 優レタルモノコソナケレ タボウテ三ツ四ツ有
ルヨト云ニ就テ 又一ツニツ購ヒ得タリ 中ニ二寸ニ三寸

許リナル石ノ頭ラニ玉石ヲ孕出セルアリ 恰モ龜ニ似タリ
是ハ文鎮ニヨカラント云シニ 農夫云フヤウハ ソレハ盆石ナ
ルヨ人ノ殊ニ持テ尊ムモノゾカシトテ 容易ニハナチ與ヘベク
モ見ヘザレバアヘテ欲セズ 又僕ガ擔グ小夜衣ヲ重ネンコト
ヲ思ヒイトフテヤミヌ

又其次キニ一ト浦アリ 即チ玉ノ浦也 大學ト云フ醫家一
軒山中ニ見エタリ 玉ハ此處ノ浦又ハ山ヨリモ出ズト云 前
々ヨリ玉ヲモチ名タムル處ナレハ 公ケヨリモ採ラセ 又好
事ノ人々採盡シテ今ハ甚稀ニシテ採得カタシトナン聞ケリ
又タマサカニハ波ニテ打揚ケルコト有リ ソレハ波ニテ能クユ
リミガケテ潤ハシ 其石中ヨリ堀リ取ル者ハ アラクシキ
璞ニシテ 容易ニミガキ難シ 大小一ナラズ小ハ蚕虫ノ大サ
大ハ六 七寸廻リアルヲ見ル 玉ハ多ク黒質 間ニ白キ者
アリ 皆石中ニ胎ミ有ルモノ也 正圖ナルモノハ稀也 其母
石ハヘケ易ク 碎ケ易ク 最モ廉頑石ナリ 其玉ヲ銜メル者

ヲ鑿チ採リ　ソノ玉バカリヲヨク磨キ盒現ニ供ス　実ニ南海
ノ一奇品也　余ガ家藏ニ宝瑤一顆アリ　瑩徹影ヲ取ル亡父
ノ藏スル所　余其傳來スル所ヲ聞カズ　今之ヲ見ルニ此浦ノ
モノト一般也　因テ此地ノ産ナルコトヲ知レリ

小岡ヲ越ヘテ浦上松ノ本ニ至ル

高芝ヨリ浦上へ廿五丁

浦上ヨリ下田原へ一里

下田原ヨリ古座へ一里十八里

古座ヨリ串本へ二里

串本ヨリ御崎へ五十丁

浦上ミ未申へ向フテ往ク　入海三十丁バカリ　汐ノ干タル時
ハ濱手ツタヒニ奥ニ入り　ソレヨリ坂ヲ越シ山路半里餘ニシテ
小川ヲ下田原へ出ル　是ヨリ古座迄岩ト磯砂濱ツタヒ也　右
手ニ津荷村アリ

大島ハ古座ヨリ午未ニアタル

串本ハ古座ヨリ申酉ニアタル

古座下筋町町家五百家許リ

川口海へ連ル

舩渡シニ丁餘

向イヲ西向ト云フ 家数アリ 是ヨリ海辺ヅタヒニ村々アリ

伊串 姫 濱辺ニ姫石アリ 橋杭 串本ハ五百軒許リ漁戸

也 左ニ大島ノ湊近ク見エル 串本ハ東風ノ正受也 是ヨリ

南ニ向ヒ行ク舩越シ原本数字分空白□□□□□□ 今ハ堀ト云フ 昔ハ海切レ

込ミテ錦ノ浦へ舟通ズト云 今ハ幅僅ニ横四 五丁ノ干潟トナ

ル 獵舩ハ引越セズト云フ 是ヨリ御崎 上野也凡四十丁四

方

石堀ヨリ七丁登レバ上野ノ平ラ也 是ヨリ御崎ノハナ迄卅二

丁ナゾへ下リ也 社少午少シ未ニ向フ 少彦名命（祀）ヲ祠ル 人

皇十代崇仁天皇ノ数

傍ニ 大己貴命 石碑

天照皇大神 石碑

高見饒命 小社

社ハ岬ノ突尖ニ南向ノ御鎮座也 社頭ヲ出レハ森木蒼鬱トシ

テ 前ハ断崖絶壁ニシテ大洋ニ臨メリ 少シ歩ヲ移セハ則方位

轉シテ未申ニ向フ 是レヨリ濱手ニ下ル小径アリ 於是岸頭
樹間ヨリ眺望スレバ 實ニ是豊秋津洲ノ極南ニシテ 極同無
辺南溟不測ノ境也 眞ニ宇宙ノ大觀殊ニ鵬翼ナキヲ恨ムルノ
ミ

時々風収マリ天霽レ雲海落暉ヲ帶テ天際ニ連綿タリ 爰ニ一
奇事ヲ見ル 因テ詳細ニ之ヲ記ス

其時フト斜陽ヲ見レハ 紅輪天辺ノ海面僅力ニ数尺上ニ内爍
ノ

變々トシテ三體ヲ現ス

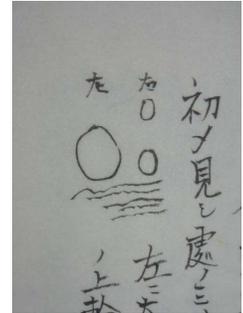
余乃チ僕

和氣村ノ人
ト云

窺[?]次ヲ顧ミテ曰ク

アラ「不アシギヤカ」ル入目ヲ拜ムコト希有ノコト也 正ニ眼
ヲ留メテ拜セヨトテ共ニ眸ヲ凝シテ觀望ス 日光幸ニ人眼ヲ
眩セス ゾンガラスヲ以テ望ガ如シ 故ニ其變体ヲ悉スコトヲ
得タリ 是レ雲影日光ヲヘダテルナレバ也 時々海面漱灑ト
シテ日光紅色ヲナシ 金色サス火彩ヲ射ズ

初メ見シ處ノ三体ノ



左ニ大輪一ツ右ニ小輪ニツ如此ナルカ 見ル内ニ右ノ
上輪ハ次第ニ小クナリ 下輪ハ次第ニ大クナリテ

如此 又見ル内ニ右ノ上ニハ小イナルマヽニ 遂ニ消

エウセ 下輪ハ遂ニ大クナリテ左右相同ジ

如此サテ元ト左ノ方ガ本体ナラント見テ居タル

處ニ 左ノ方漸々小クナリテ

此ノ如ナルヨト見ル内ニ 遂ニ亦無クナリテ

只右ノ方一輪バカリ残リテ

如此太陽一輪敢然トシテ既ニ海面ニ浸リ

光彩宛然トシテアリくト海際ニ入ヌ

維時文政十一年戊子十月九日是日亥ノ子也 是夜神主潮崎

但馬方ニ宿ス

右入日ノ変態ヲ見シコトヲ話シ 又富士山頂ニ朝日ノコトド

モ物語シテ 此地ハ南溟ノ極界ナレバ 入日モイヅレ変体ヲ
現ハスコトモアラン ソコニモ見侍ランヤト尋ネシニ否左様ナ
コトハ遂ニナシト云 余又朝日ハイカナラント思テ 翌早ト
ク起キテ之ヲ窺フモ 黯雲イト濃ク立コメテ 雲ノマニク
チラ／＼ト旭日ノ光ヲ泄ス 日上ルコト既ニ三竿バカリニシ
テ 曜靈始テ金耀ヲ現ス 但馬曰ク、朝陽ノ靈象ハイツモ雲
立幕メテ現ズコトナシト云ヘリ 於是余私力ニ其理ヲ考索ス
ルニ 俗間ニ祈謂廿三夜 或ハ廿七夜ノ月ノ出ニハ必ズ二体ツ
／＼出ル 又イツヤラノ海面へ出アカル時ハ必ズ三体也 或ハ
ソレノ暁キニ体ノ月ノ出ヲ拜ミシノ、或ハ日ノ出ノ二体ヲ拜ミ
シナト能ク云フコト也 然レトモ日月モ二体出ルノ理ハナ
キコトナレバ 愚俗ノ言ナリトテ曾テ取り信セズ
又司馬江漢力天説ヲ見シニ 月ノ二ツ重リテ出ルヲ見ルハ
日月共ニ地上ヲ離レントスル時 地氣之ニ係レハ則其形橢圓
トナル 其半ニ雲ヲ帶ブ 故ニ其躰ニツノ如シ

又曰 寛政乙卯四月廿一日ノ夜亥ノ刻関ノ□農夫四[?]五輩^地名

ト昭月ノ変態ヲ見ル 其形三□□隅^{原本欠字カク}或ハ四隅^{カク}亦二体トナル

是狐 狸ノ愚今誑カス者也 月ノ変態ヲナスノ理ナシ

此説実ニ然リト思ヘリ 然ルニ吾レ此行 僕ト共ニ太陽ノ変態ヲ実睹シ得タリ 実ニ造化ノ理数無尽蔵ナル者也

因又其然ル所以テ案スルニ 日月固ヨリ数体ヲナス様ナシ

故二人其変態ヲ見ルト雖モ 日月ニ於テハ曾テ変異ハナキコ

ト也 是レ蓋シ日月海面ヲ出入スルノ際 水雲相對映シテ

時ニ或ハ変態ヲ見ル 故ニ其変態ヲ見ルモ必ズ朝カタカ 必

ズ雲有テ雨氣ヲ含ム時ニ在ルコト也 他時晴天又雨氣有テモ

晝間ナドニ決シテハ無キコト也

又是年□□春二月十八日 余ガ郷人皆共ニ山頭ノ朝日ノ二体アルコトヲ見ル 其時日輪暈ヲ帶ブ 其暈ノ両辺ニ又各小

此兩方ノ日輪モ始メハ中ノ

キ日輪アリ

日輪ト同シ大サナルベシ

其一両日後美濃ノ順礼来リ

ニ此事ヲ語レハ順禮云ク ソレハシヤウノ雲ト云テ 手前ノ國テハ間ニアルコト也 必三日ノ中ニ雨フル也トイヘリ 果シテ其ノ三日目ニ雨フレリ 時ニ余ハ京 攝ニ遊ビテ見ルコトヲ得ズ

然レバ雲氣 水氣ヲ帶ビ 水氣日光ヲ受ケテ相照映スルノ致ス所ナルベシ 然レトモ其相照映シテ然ルユエンノ理ハ知ルベカラズ 余ガ今次見シハ 十月九日ナリ 十一日太地ニ歸ル 十二日大風雨 此夜海潮大ニ溢レテ和田氏ノ門前ニ至ル 是亦其三日目ナリ 因レ此觀レ之日輪ノ変態ヲ見ル時ハ 必ズ風雨ノ兆ト知テ海路舟行ハ心得ベキコト也 又月ノ二体出ルト云フコト 未タ其實ヲ得サレドモ 是亦必スシモ無シト云フベケンヤ 若シ又有之亦必雨兆ナルベシ

江漢氏ハ其見ザルヲ以テ 狐 狸ノ誑ヲ受クル也ト笑ヒシハ

宜ナレドモ 其理到ニ於テハ知見ヲ盡サズル所アリ
又案ズルニ木氣ノ變態ヲナスコト一ナラズ 余別ニ論著スル
所アリ今贅セズ

九日 潮ノ御崎 潮崎但馬

亥ノ子ナリケル夜潮ノ御崎ニ舎リケルニ イトアタヽカニ蚊ノ
出テ来ニケル 寒ニ室郡極南トゾボヘ侍ル

夜半ノ蚊ノ耳驚カス 神無月

主人曰ク 蚊帳ヲサゲヌ月ハ 年間一両月バカリト云ヘリ
氣候ノ暖ナル知ルヘキ也 此夜神戸ノ庭上ニテ北辰ヲ窺フニ
・三十四度少シ不及 此ノ地日ハ卯辰ニ出テ申酉ニ入ル

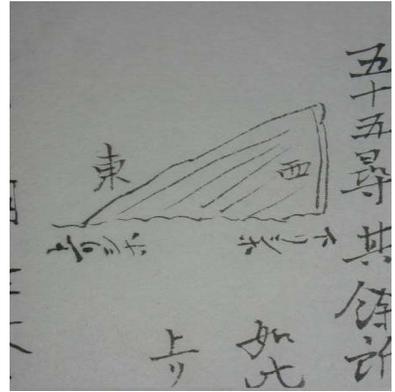
江住 和深戌亥ニアタル

潮ノ事

岬ノ上ボリ 下リ潮ト云フコトアリ

岬ヨリ海上ニ一里餘 海庭ニ大磐石アリ 其岩迄ハ深五十五

尋 其餘所ハ八十尋



如此ユエ下潮ハ激シテアラク
上リ潮ハ岩ノヘナレハユルシ(ナソヘカ)

此磐右潮ノ往来ニアタル一番潮幅二里ハ

カリ 其次ハ又又ルシ 又其次ハ二番潮ニシテハヤシ 潮モハ
ヤキ時アリユルキ時アリ 櫓一挺ニシテ押シ切ルヲ一丁切り
ト云フ 是ヨリ次第シテ或ハ五丁切り、八丁切り杯ト云フ也

潮ノ上ボリ、下ダリ一月中ニカハルコトアリ 又数年上リ、
数年下ルコトアリ 上リ潮ヨリ下リ潮ガ久シキ様ナリ 前方
上リ潮九年ツヽキシ事アリ 近年足カケ六年上リ潮ツヽキ
シカ 今ハ休ミ潮也

上リ潮ニハ獵事少ナク 上リ潮ニハ獵船七里モ沖へ出ル 下
リ潮ニハ漁事多シトイヘリ 潮ノヨハルヲイタミト云 又海上

ノ遠近ヲ量ル大法

舟見三里 帆見七里ト云 是レ舟カラ舟ノ遠近ノ大数ナリ 又
浪カケ三里ト云フコトアリ 是ハ沖ノ舟ヨリ磯ノ波打ノ見ヘル所
ヲ凡ソ三里トツモル法也

十日 古座 八幡屋孫兵衛

十一日 太地 和田氏

十二日 大風雨

十三日 十四日 十五日 同所

十六日 森ノ浦ヨリ宇久井迄舟 舟ちん五百文

十七日 新宮 十六(十八日) 日帰宅

串本無量寺座敷ノ画ヲ見ル 皆蘆雪ノ筆也 奥ノ八畳ノ間バ

カリ應擧也

一 十畳敷二面 フスマ寺子ノ圖

一 其後 □ 八畳敷 芦二鶴

一 佛間十二畳敷 フスマ両方 一方龍 一方虎

一 十畳敷 鷄ツガヒ 長春猫

一 奥ノ八畳敷 フスマニ面 仙人十一人 天明六年丙午

円山應舉 五十四年

一 床 松岩一浪 壁上ノ一軸 大幅
彩画 牡丹 岩雀三羽

一 書院 六畳 八畳弐間

カラ紙四枚

表 枝二鳥 裏 熊

蔦二猿 龍力虎カ分ラズ

竹二猫 虎

芦ニアヒル 狼皆異形

仙人二人 寒山拾得

已上

みつながしは 三崎二在り

多づね来てみつなかしはの一本は昔をしのぶよすかとぞなる

那智の瀧

なちの山ふりさけ見れば久方の雲かあらぬか瀧の白玉

冷泉院光卿

ここにます神にたむけのぬさなれやしほのみさきに寄する白浪

三網ガシハ

御崎二在り他所ニナシ赤キ花咲キ実ナルト云フ樹大ナルモノ六

寸廻リノ小木也

鯨ノ一條ハ別ニ鯨之記ヲ作ル 此ニラス

末鯤ノ牙 百六十目

斤二付銀十八匁替

貳本求ム

壹本ハ 壹百貳拾六匁
壹本ハ 八十匁

代壹歩貳朱 ぜに七十二文過

カモノカシラ 一名遠山ノリ 海藻ナリ(芝目)

ギンバリ シュク鮫ト 鮫トアル背ビレ也

マンボ 一名ウキキ 尾ナキ者也 能ク寝入ルモノニテ身

ヲ 半分切レトモシラヌト云

ホウボ 一名カナガシラ

渚魚コド コンド 天渡船テントフネ

ウグヒ 海ヨリ上リ又海一_ニ下タルノ海鯉ナラン

城ノシヤチホコリ マツカツ魚ナリ マツカツハ水ヲ好ム シ

ウ ンハ風ヲ好ム

宇久井浦ノ大豆石 九重村ニコボシ石アリ

ケンザキ カジキ通シ身五尺許 嘴三尺許リ 本ニテ三_ニ四

寸

蘭山ハノフラギ也ト云 カジキ通チヨウザメ口魚トスルハ非

也 ト云フ

近江名所圖絵ノ初ニ 龍公莫

氷肌玉骨伴清吟 正是孤山夜末深

一陣輕風春都ス都ニ 半窓残月影沈ミ

太地 燈明ガハナ 辰巳向キ也 村ヨリ十八丁ノ出崎也

丑 寅ノ方ニ當テ三木崎ヲ見ル十六里

梶取崎 卯辰向キ也 灯明ヨリ東方ニ當テ五 六丁

大島 カシノ崎灯明ヨリ未申ニ當テ三里也

太地覺右衛門 臨海堂 上ノ様ト云

太地伴十郎 下リ様ト云

太地重之丈 太地奎之介

和田金右衛門 重之丞事五郎左衛門ト改名

和田孫才次

和田治右衛門 庄太夫ノ子息

和田小文治

和田金右衛門 三黄丸 同人息女 以おか圭岑

井筒屋彌七 柴胡□□ 三番村 傳左衛門 弓黄散

戎屋芳七 八仙丸 西村興一郎 孫平 勇七

仲助
公七

八仙丸
番坐丸

昔坊木寺矣ハ

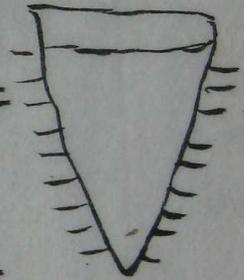
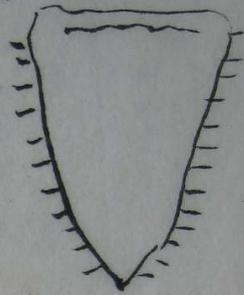
羽刺ノ名前 大夫名多シ 太ノ字ヲカヽズ書ノ中ノ点ヲ去ル

太田組帳書 市右衛門

鰐鮫 又大鮫ナリト云 重之文殿ノ勝手ノ入口上ニ其シヤレ

頭ヲ掛タリ 其様スサマシキ者也 ロノ廻リ凡ソ一

抱 モアリ 其齒ハ小ニシテ上下共ニ三重ニアリ



大サ目ノ如シ
白ウミテウスシ

金ニ重クモテ請得タリ是文政十一年より十
年以前取リシ者ト云ハ魚共節ニ輪浦ニ鯨
ヲ捕テ^{オラ}沈シタリ此魚終夜其鯨ヲ食フ毎
リテ働キ止マル故ニ捕リ得タリト云

己上 路用 式步式朱 七百文

外ニ 壹步式朱 四百文 置物

天保十年己亥五月十四日菱足南遊ノ記

同行祐川寺泰秀和尚 榎本新太郎及ビ余僕兀留吉已上四人

十四日 新宮泊リ 小川屋

十五日 太地 魚屋茂十郎宿 勝浦ヨリ太地迄舟ニ乗ル

十六日 藏土 山本房右衛門殿宿 右山本氏へ和尚用事ニ付参

リ候故同道致候也 藏土ハ古座ヨリ舟路四里川上也

陸地ハ三里トイフ 難所也

古座池ノ口ヨリ乗船 池ノ口ハ古座ヨリ十八丁上ミ也

ハ 一里バカリ川上ニ右手ニ小川ノ出合アリ 三里奥ニ瀧ノ

エト云所有 岩一面ハエトナリテ壺トナリシモノ 数

限ナ シ 甚面白キ所トイヘリ

此所ニ家ニ 四軒アリト云フ 水有ル節ハ舟其處迄通フ

ト 也 此小川筋モ所々ニ家居アリトイフ

又右手ニ一枚岩トイフアリ 藏土ヨリ三十丁許リモ下モ

喰

也 此川筋モ所々ニ家居見工 左右大抵岩山ニテ 虫

岩甚タ多シ

一枚岩ノ圖アラタマ左ノ通り

十七日 藏土滞留 家数寺共五軒
 十八日 串本 雜賀屋六兵衛泊り 和尚八用事二付藏土滞留二



付余榎本氏ト二人出立 一人案内者ヲ取り山越シニ串
本至ル 藏土ヨリ二里下モ鶴川トイフ所迄舟ニ乗リ ソ
レヨリニブ越ヘトテ山路人家ナシ

二里ヲ越ヘテ錦浦ノ袋ヲ經テ串本ニ至ル 藏土ヨリ串本
迄合四里也 是ヨリ御埼ヘ参詣シテ串本ニ歸リ宿ス

十九日 太地 和田金右衛門殿へ宿

二十日 太地 滞留

今年ヨリ十二年以前 文政十一年 戊子十月十一日ヨリ
十五日迄太地和田氏ニ滞留致シ候 今年又再遊也

廿一日 新宮 小川屋

但シ太地ヨリ舟 三人カゴニテ宇久井迄送りクレラレ
候

廿二日 新宮 滞留

廿三日 同断

廿四日 帰宅 余榎本氏ト二人陸地ニテ歸ル

一鯨船一艘ノ作事入用

式々目ト云 道具一切共

寝鯨 寝流シ

太地ニテ撰生論トイフ書寫本也ヲ見タリ 其書ニ曰ク

海鱈其品凡六種 慶長年中筑紫諸浦ノ漁人 始メテホコヲ以テ突得

テ 油ヲ取り肉ヲ棄ツト云ニ 慶長年中熊野太地浦ニテ堺伊右

衛門ト云フ者 銛ヲ作り海鱈ヲ突キ得タリ云々 筑紫ト太地ト

ノ遅速イツレゾト思フニ 泉州ヨリ伊右衛門ト云フ者 太地浦へ

来リ住 慶長十七年壬子始メテ鯨ヲ突キ得家業トス 其後太地

金右衛門・太地覺右衛門 尾州小野浦與平次ト云フ者ヲ羽指ハサシニ

立テ 元和四戊午ヨリ專ラ海鱈ヲ捕テ家ヲ富ス云々

七里四方ヲ潤ストイヘリ 云々

延宝五丁巳太地覺右衛門網ヲ作り 網代ヲ防キ坐頭鯨ヲ取得テ

巨富ヲナセリ

昔ハ一ト冬ニ鯨九十六尾ヲ取り得タルコトアリト云 今ハ昔ノヤ
ウニ鯨来ルコト少ナシト云

逆^イ針^ケ

惠能ノ偈

本来無東西 何處惹塵埃

坐頭鯨八年々三 四百尾通ル 昔ハ千尾モ通ル 百疋二一・二本
捕レバヨシトス

今年セミ鯨五 六十通りテ十五 六本ヲ得タリ

兎鯨四 五十本通りテ二十本許リ得タリ

鯨ノ目ノ玉ハナキモノト云 スベテ無鱗魚ニハ玉ナシ 眼ハ唯精液
ナリト云フ

中根七郎氏本書に附書して曰く

「本書の原本は和歌山縣

東牟婁郡誌の著者 同郡宇久井村ノ人田原菱吉氏の所蔵にかゝる寫本にして 其寫本は同郡請川村澁修禮氏の原著を寫されたるもの也 予は昭和九年四月初めて二本を寫し 其一本は和歌山縣立図書館に納め 残る一本を家蔵したるが 今茲昭和十二年十月更に複寫して その一本を同敷西牟婁郡万呂の人 大谷稻次氏へ送呈したり 本書はその残本なり」と而して 本書八宇井縫藏氏に贈られたるを 昭和十五年六月同人より貸與せられて寫とるもの也

芝口常楠

請川の医家澁家は下里の南紀愆泉堂とゞもに幾多の文人を生み 殊に五代前の簡條禮は医を木下順菴に習ひ 南画の祖祇園南海 郡山の名臣柳里恭 池大雅 應舉門の高足 孝敬 谷文晁などゝ交つた一世の文人だったので 本宮に詣でた文人墨客の來訪絶えなかつたときゝ 同家を訪ふと當主利愛氏は快く 里恭其の他の遺墨を見せてくれた。そのうち最も私達を驚かせたの簡修禮の 鯨に関する研究であり 同家に秘蔵するその著「南海奇賞鯨の記」は簡修禮ノ幾度か太地浦に赴き 鯨長者和田氏について熊野捕鯨の業の実情を調査 詳細なる寫生圖 解剖圖百葉を附し 南紀の捕鯨を総説は

じまつて 鯨の種類 漁捕 地方ト捕鯨方法 解剖 用途 潮候 号令 器械 船 旗幟 銚
・網に至るまで七十ページにわたり詳述したもので 名文よく捕鯨の実況を傳へるとも
もに 科学者らしい観察および鯨に関する動物学的研究 用途に至るまで 細大残ら
すことなく 本邦における唯一の鯨に関する生物学上の文献であると共に 熊野浦の
捕鯨史を永久に記念する素張らしい郷土資料である。この天下の奇書として誇るべき
貴重な著述は 筆者の知るところでは南紀愆^{ケン}泉堂に寫本一部を藏する外 殆ど他に
傳はつてゐない。誰か瀏家に乞ふて公刊される篤志家があれば 南紀のためにまことに
欣びにたへない。

山里に人を珍ながら暇ごと鯨究めし大人の家かも

これはしも餘技になりしか繪も書物もまこと鯨ら究め盡せり

ぬまを

右は昭和九年八月發行 大阪毎日新聞和歌山支局の西瀨英一氏の

「南紀風物誌」よりの抜粋である。歌の「ぬまを」と号するは 西瀨

氏 と同じせる松尾ぬまを氏なり。

昭和三十六年九月五日写本了

芝口先生の藏本を借りて写す

宿直の夜 清水 長一郎

南海奇賞鯨之記のデジタル化を終わって

文政の人請川の渚簡修禮とはどんな人物であつたのだろうか。今でも請川と聞けば山奥と第一に思う程である処なのに、時代が進んだ江戸幕末とはいえ、何回も古座まで出向き、滞在しながら鯨の生態 捕鯨を熱心に且つ詳細に鑑査し記録してゐるのには感心する。

また医者として最新の知識を見分していたと見え、オランダ・ロシア・カムチャツカ等外国の地名も出てくる。最初写本を前読み始めた時は、明治の文献かと思つたが、途中に文政の年号が出て来、江戸時代のものと思つた。文政と云えば今から約三〇〇年前第十一代將軍徳川家斉の時代である。

デジタル化をやつと終つた。木村県知事の辞任に伴う後任選挙や、年末年始が重なり写本に随分と時間を費やした。また図 絵 が多く、例の如く図はコピーして貼付ようつと考へたが、折角の資料中の図が、インターネットでは見て貰えないので、デジカメで撮影取り込んだ。今回はトリミングなど一切せず、ただ初期のデジカメで写つたまゝ載せた。最新の機種ではコンパクト型でもかなり接写が可能と聞く。文献中の図や表の複写はスキヤナーが便利だが、古地図などの複写にはデジカメ一眼レフの方が利用で価値があるか検討中である。ま 何とか写本が終わりホツトしている。

平成十九(二〇〇七)年一月二十日

清水 章 博

この資料を知たのは小川鼎三の「鯨の話」です。彼は下のとおり記しています。

私は新宮からプロペラ船というものに乗って熊野川を遡っていた。九里峡というところでは雲を突いて聳えている絶壁の下をきれいな水が流れていた。筏がたくさん川を下ってくる。このコースを私がえらんだのは、本宮の近くの請川村に淵という旧家があって、先祖の淵籟 修禮という昔の医者の方が書いた鯨の本があることを私は東海道線の汽車の中で読んだ本によって知たので、それを見せていただく考えであった。

淵家では紹介なしの突然の脚であったにもかかわらず丁寧な待遇を受け、さそく『南海奇賞 区慈羅乃記』と題する和紙三〇枚を綴じた本文と、その他に附図約一〇〇枚のものを見せてくださった。本文は太地における捕鯨業を仔細に、科学的に述べてある。捕鯨の実況を説くところなどはじつに名文であるとおもった。鯨の種類の附記として、シヤチクロ、イルカ、大魚喰、オイオクヒ、ゴトについての説明があり、ことに大魚喰についての記載がはなはだ参考になった。オイオクヒを私はのちにプセウドオルカクラッシデンス *Pseudorca crassidens* (Owen) に同定したのである。『区慈羅乃記』には年代が見あたらなかったが、淵修禮の筆と思われるその附図のなかに「文政二年二月の字があった。

小川鼎三(1978)鯨の話 pp.35-36 小川は日本人による近代鯨類学の開祖であり、近世の知識体系を近代鯨類学に接合した人物であると考えています。現在、生物学で使用される標準和名の多くは近世からの流れをくむもので、小川の提案によるものです。これによって近代と伝統の知がながたと理解しています。1930年代に小川が進めた仕事を再評価するにも「南海奇賞鯨之記」は最も重要な資料であり、ぜひとも拝見したく思っております。

東京農業大学・博物館情報研究室室准教授 宇仁義和氏にいただく。

平成二十七年二月二日